小田原史談

第236号
発行所　小田原史談会
小田原市東町 1-21-18
平倉方　TEL (34) 8363

# 小田原蒲鉾の籠清です

## 話し手　石黒　駒士さん

### 創業二百年

私は昭和十五年（一九四〇）生まれ、育ったのはほとんど小田原です。父と母は、母の里の二宮に別に家があったのでそこにいて、おやじはもともとサラリーマンだったんですね。

私どもは文化十一年（一八一四）三月の創業で初代は又七、来年（平成二十六年）に二百年になります。うちの菩提寺は山王の宗福寺で、関東大震災時の津波で流されて、残ったところだけお寺さんから聞き、記録したんですけれども、過去帳が流され、墓石も倒れて造り直しているもので、その前がわからないのです。過去帳は祖父の前の前くらいからですね。

私で七代目になります。その間には戦争も含めてショートリリーフもありましたからね。

### 昔は「籠屋」と言っていた

小田原の蒲鉾は江戸の末期くらいからでしょうか。文献を見るともっと前からとか、城主に献上したとか、もてなしに料理人がつくったとかあるようです。

よそ様のことはあんまり知りませんが、今残っている中ではうちは一番古い方じゃないでしょうか。

うちは「籠屋」という屋号で魚市場で魚を買っていたんです。おじいさん（駒吉　明治十六年生）の従兄弟たちが八王子辺りに行って呉服屋さんやったり旅籠や下駄屋やったりしていました。あちらには昔、小田原の出城があったり支藩があったりした時代があったんですね。それで私のおじいさんが小田原で魚を買ってそちらに供給していたんです。

当時、市場は五日にいっぺんの現金決済で、ところが向こうから金が入ってこないと滞っちゃうわけですよ。それであるとき「籠屋」で買っていたのをストップされたことがあった。それで「籠屋」名義で買えなくなってしまったんです。

おじいさん（駒吉）に清次郎という兄さんがいて、清次郎の名前をとって「籠清」という新しい名前でもって市場で魚を買うことを許されたらしいです。

それも、二宮尊徳さんのお弟子で高橋さんという人が米屋をやっていて羽振りがよかった。この高橋さんの援助で立て直したんですね。それで「籠清」という名をいただいたらしいんです。これはおばあさんから聞いています。

籠清本店（『小田原百景ー道と建物篇』齋藤四郎さん作品集より転載）

二三六号（平成二十六年一月号）

目　次

小田原蒲鉾の籠清です　石黒　駒士・・1
小田原の郷土史再発見　江戸の老舗小田原屋と北條氏直遺児伝承　石井　啓文・・6
最乗寺道了尊の再生に尽くした曽比屋三代目辻村甚八郎　内田　清・・10
中村湾・中村潟そして「中村湖」　梅田　仙吉・・13
小田原大秘録　第六回　巻二の三　鳥居泰一郎・・16
旅のつれづれ俳句日記　剣持　芳枝・・19
小田原藩浅田兄弟の敵討「孝貞義鑑散策」（18）　鈴木　好・・20
追悼・市川清司さん　会長　平倉　正・・23
みみづく園長一代記　千葉　恵美・・24
小田原の街角写真今昔②　植田　士郎・・26
史跡巡り案内・・・・・・・・・・27
佐奈田与一余話・・・・・・・・・・27
特別賛助会員・落穂集・・・・・・28

## 清次郎がいて常吉、駒吉がいた

清次郎の前が徳治郎という人で、徳治郎には清次郎・常吉・駒吉と三人の男の子がいたんです。清次郎の時代は、季節によって蒲鉾をつくり、これを箱根に持って行って売っていました。

【清次郎の残した「顧往時」】

「元治元年四月十三日古新宿にて出生。明治三年十月千度小路山田直次郎所有の家を借家し長するに従ひ板橋箱根方面への魚商六七八九月迄は行商を主とし他の月は内賣をし結婚用又は祝魚を商ふ事を専ら業となす。明治五年九才の時仝町高橋庄蔵氏の空店を借入移轉従前通り蒲鉾製造を開始せり。」（『小田原蒲鉾のあゆみ』（本多康宏）より）

冬の鰤の頃には鈴木（市左衛門）さんたちと一緒に鰤とったり、菰（こも）で巻いてそれを荷車に積んで、まだ小田原まで東海道線ないですから国府津まで持って行って築地の魚市場に出荷していた。鯵が獲れれば干物をきる、烏賊が獲れれば塩辛きる。いろいろやっていたみたいですよ。

清次郎には子がなくて、弟の駒吉が養子に入って籠清を継いだ。真ん中の常吉さんが、鰹節やったり塩辛きったり干物きったりしてと、分かれて「籠常」となった。明治の頃の話で、「籠常」は確か明治二十六年（一八九三）の創業です。

【第五回内国勧業博覧会（明治三十六年）受賞人（抄）】

二等賞　蒲鉾　高瀬善八
三等賞　紫蘇巻梅干　小峰徳次郎
仝　烏賊鰹塩辛　同人
褒状　二番鰯（するめ）　石黒清次郎
仝　鰹節　日比谷與八
仝　麻糸網地　曽我安五郎
仝　乾鱈（しいら）　石田弥五兵衛
仝　山口留吉
仝　乾鰹　日比谷藤助
仝　鮫油　日比谷與八
仝　鮪油　石黒清次郎
仝　紫蘇漿柚餅　小峰徳次郎

（『明治小田原町誌』（下）より）

## 父はサラリーマンだったんです

父（弘）は大正五年（一九一六）生まれ、五人兄弟の四番目で、長兄は十歳くらいで亡くなり、次兄も二十幾つで胸の病で亡くなって、三番目は芸大出て音楽家になったんです。父はこの籠清を継ぐつもりはなかったんですが、偶々やるべき人が二十幾つで亡くなってしまったんで、音楽家が蒲鉾屋をやるわけにはいかねえってことで引き受けた。

父は早稲田を出て、今でいうニチレイに勤めてサラリーマンになった。ここをみながら勤めるには東京に通ってられないということで、戦争中は富士フイルムに勤めたんです。戦後になって、籠清をやらなきゃならないというので勤めをやめたみたいですね。

## 二宮は思い出の地

私の母（八重子）は東京の人間でして、歌が好きで俳句もやっていました。父と母は二宮に住んでいて、子供の頃、私は二宮まで東海道線でよく遊びに行ってましたよ。二宮の家はいま蘇峰記念館になってますが、あのところが母の実家だったんです。

私が聞いている話では、（母方の）おじいさん（兼成）は、今の伊勢丹の前あたりでタクシー会社や修理工場をやっていた。外国から車ひいたり（輸入）することを商売にしてたんですね。慶応では野球解説で有名な小西（得郎）さんと同級生だったといいます。

結構広い屋敷で、庭に滝があって、梅の木もたくさんあって、玄関前には馬車廻しがあった。おじいさんは、朝起きると別棟の書斎にこもって、仕事したり本読んだり手紙書いたりしている人でした。蘇峰の秘書をやっておられた塩崎さんが買われて、蘇峰さんの記念館にされたんです。

父方のおじいさん（駒吉）は私が小学六年のときに亡くなりました。私は、おじいさんの駒をとって駒士（こまお）です。

## 統制時代のこと

戦争中は材料入りませんからね、油もありません。何もなかった。知っているのは、統制時代は、政府から例えば小田原蒲鉾組合に月に何トン魚が割り当てられて、それを下関・博多・長崎から貨車に載せられて、静岡・小田原に着いて、それを荷馬車で取りに行くんです。その頃は売り上げ順に、例えば百入ると、その三十は一番のところへ、二十はどこへと割っていく。今その割り振り表が小田原蒲鉾組合にあります。そのときの一番がうちだったんです。

統制でも売るのは結構自由に売れました。そんなにたくさん量が出来ませんからね。五軒くらいずつ集って共同作業して、出来たものを皆で分けて売って収入にしていたのです。当時は、蒲鉾屋は二十軒なかったくらいだった。

私が覚えているのは、この浜にサメが揚がりますと、ドラム缶に下から火をボンボン燃す。サメの

肝臓を取り出して、そのドラム缶にぶち込んで煮るんですね。ものすごい臭い匂いです。そうすると肝油がとれます。その油で揚げ物をする。そのサメの身の方は水で晒して原料にした。小魚が揚がればそれを一緒にして揚げ物つくったり、竹輪つくったりしてましたね。それはつくったそばから売れてしまった。

【戦時統制下の共同生産】

「この共同生産は、鈴廣・籠清・丸うの工場で組合員が竹輪・ハンペンなどを製造してこれを配給所に送り、その売り上げを組合員に分配する方式をとった。こうして小田原蒲鉾組合は戦時下に生き残り、揚げ・竹輪・ハンペン・つみれの製造で組合員の廃業、転業者を出すことなく終戦を迎えましたが、残念なことに板付蒲鉾は姿を消しました。」（『小田原蒲鉾のあゆみ』より）

昔は私設の魚市場が三つか四つあったらしい。私の子供の頃にはここから一分くらいのところに市場があって、そこへ朝からリアカーや自転車で魚屋さんが集ってきて、ここら辺はすごい賑やかでしたね。

## 二人の「師匠」がいた

私は、大学卒業してすぐ同業者のところで一年修業し、そのあとは静岡に蒲鉾の原料を扱う問屋さんがあってそこに半年くらいいたら、父が病気で小田原に帰ってきました。父は昭和四十二年（一九六七）に五十一歳で亡くなりました。そのとき私は二十四、五だったですね。

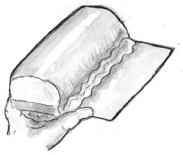
その頃は従業員は四十何人で、おじいさんの時代からいる人もいて、みんな私より年上でした。どうするたって、やるしかないですからね。

おじいさんのときからいた工場長みたいな人は八十幾つで、その人が全部仕切っていました。よそで一年勉強してきたって蒲鉾つくることできませんよ。うちの蒲鉾がどうなってるんだか、よそと違いますからね。小さい頃から休みのときはおやじから言われて手伝いしてましたがね、そんなに詳しいことまで知りませんよ。とにかくその人に教えて下さいとお願いしたら快くいろいろと教えてくれましたね。魚の見分け方、鮮度、買い方、駆け引きだとか教わりました。

もう一人は作る方が非常に上手な人で、親指は私の二倍くらいありましたね。すごく太い指でした。欅のまな板を一〇ｍくらい並べて、その両側に職人が座るんです。魚のすり身をその上にトンと置きますね。最初に板で下から付けてくる。順番にいって、最後にきれいに上塗りかけて両端を切るんです。水をつけながら撫でて、蒸籠（せいろ）に並べて、それを十段に積んで、下からお湯湧かして蒸すんです。全部手づくり。腰高の地紙形（扇形）が小田原の蒲鉾の形です。

うちで一日千枚蒲鉾をつくったなんて言うと、「籠清で千枚つくったんだってよ」と評判になるくらいだった（今は違います。機械です）。

蒲鉾のかたちが出来たところにキズはつけられないですから、木（から板）と蒲鉾の間に爪というか指を突っ込んでやらないと出来ないわけです。手を掛けるわけです。



【小田原蒲鉾協同組合】

戦後の蒲鉾商組合（十七軒）を経て、一九六六年、小田原蒲鉾水産加工業協同組合が発足した。二〇一三年現在は、籠清、丸う、伊勢兼、鈴松、鈴廣、杉兼、山一、鱗吉、土岩、杉清、山上、佐倉、脇谷の十三社が加盟している。

## 地の魚をつかっていた頃

蒲鉾って全国各地にあるんです。昔はその地の港で獲れる魚でつくっていました。小田原は小田原の浜で獲れたものでなきゃあできないんですもの。例えば百獲れると五十はナマで売れる。あと五十は残ってしまう。今みたいに冷蔵庫入れて保存しようとかできないですよ。それでもったねえじゃねえかと話がはじまって、身だけとって加工して蒲鉾にするとか揚げ物にすると、一日のところが二日もつ、三日もつ、というようになったんだと思いますよ。

夏場ならイサキだとかタカベ・小アジ・カマス、こういうものでつくっていた。冬になると、クロムツがあります。オキギスといって天麩羅にするキスの親分みたいな、頭真っ黒で、ワニみたいなかたちのでかいやつもあります。これは相当深く延縄（はえなわ）つけて、一〇〇ｍくらい流すんです。そういう仕掛けを作った専門の漁師が昔はいたらしいんですけど、今そんなことやったって飯食えないから漁師がやってくれないですよ。オキギスは獲らないから、この沖行けばいますよ。

## グチには「あし」がある

小田原の蒲鉾はかたいと言われます。蒲鉾の材料のグチはもともと「あし」（弾力）がある魚なんです。マグロは「あし」がないし、色も赤いから駄目なんです。

海の塩分濃度は三パーセント

で、魚肉に同じように塩を入れると、魚肉にはタンパク質が結合してくる性質があるんです。だから、魚の身をとってそれに塩分を入れて少しかき回していくと、結着力が出てくる。

知らないお客さんは「弾力増強剤入れてるんだろ」とおっしゃるんですが、魚によって結着力のあるのとないのがありますけれど、だいたい海の塩分と同じ程度のものを入れると弾力が出てきて、魚の身と身とが結合してああいう弾力が出てくるんです。

グチ・エソ・ハモ、そういうものは「あし」が出やすい魚なんです。その性質を見つけたのがえらいと思うんですよ。タイなんかはやっても駄目なんです。

昔は、そういう意味では北海道から九州沖縄までそれぞれ自分の前浜で獲れた魚で蒲鉾なり揚げ物・おでん種つくっていたから特色があったんですね。

それが今もう沿岸で魚が獲れないじゃないですか。ですから全国同じようなものになっちゃうんですよ。

東シナ海で獲れるグチは一番いいと言われますが、日本の船がなくなって、中国や韓国の船がとって九州の市場に揚がったものを我々が買ってるんです。だからどんどん日本から遠くなって、鮮魚でなく現地で一次加工して、さらし身を二十キロのパンにしてもらって、それを凍結したものが日本に入ってきてるんです。

五〇から六〇ｍ下まで網を沈めて、底引き網で根こそぎ獲っちゃう。中国では今「虎網」といって、それこそ根こそぎ獲ってしまいます。

## 冷凍タラが世界中にとんでいる

白身の魚はアラスカのタラですね。それが、日本の蒲鉾屋さん約千軒くらいありますけれど、ほとんどがタラを原料として蒲鉾や揚げ物をつくってます。特殊なところだけが、例えば小田原・大阪・山口県とかがハモやエソを使っているだけですね。

蒲鉾の年間の生産量は、昭和五十年は百三万トンくらいいったんです。それが今は半分、四十七万トンに落ちてしまいました。

昭和三十七、八年頃に北海道の沖で無尽蔵にタラが獲れたんですね。それを原料にして日本水産やマルハさんがすり身を作り出したんです。それがどんどん普及してきて、「これは安くて真っ白けでいい」ということで、今までの原料みんな使わなくなって、それを使い出したんです。それから黒い色のものなどがなくなってきたんですよ。

逆に今になって、カルシウムがあるからいいとか何とかいう謳い文句で脚光を浴びてきているんだけれども、それが本来のものがなくなったんですよ、途中でみんな消しちゃうんですもの。

それで今、アメリカで年間百二十万トンくらい獲ってよろしいというタラの枠があるんですね。それで三十万トンくらいすり身が出来ます。それが日本だけじゃなくて韓国・中国・台湾・ヨーロッパと、世界中にとんでるわけです。

## カニ蒲鉾は一番のヒット

蒲鉾、揚げ物、ハンペン、カニカマなどは煉り製品です。煉り製品は百や二百種類あります。

カニカマは蟹のイミテーションですが、これが凄いですよ。あの技術は日本でできた技術なんです。機械の元々は日本で作ってる。その機械自体を外国に売ってますから、その機械を買って技術を教え込めばどこででもできるんです。アメリカのすり身を買えば、どこでもできる。

今一番、蟹のイミテーション作ってるのは、バルト三国のリトアニアです。何年か前にEUにも加盟しましたから、ヨーロッパ中に行っている筈です。ヨーロッパへ行って蟹サラダを頼むと、その上にボーンと載っている。「何これ、すごいね」と食べたらこれが蟹のイミテーションだった。おいしいですからね。あれは戦後の煉り製品の中で一番のヒットじゃないですか。あれだけだって何万トンも日本から輸出されてますし、中国だってたくさん作ってます。

原料の供給地も今までと違ってあちこちに広がってきているわけなんですよ、だけど、先ほど申し上げましたように、百三万トンあったのが四十七万トン切りましたからね。

今、私どもナマの魚買ってますけど、それだけではとても足りませんので、タイ・ベトナム・インドなどで作っているグチのすり身を凍結したものを何百トンという単位で買ってます。それでないとできないですもの。

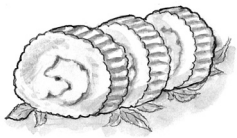
## 工場は焼津です

籠清の工場は静岡県焼津、大井川の河口にあります。工場建てたのは今から四十年くらい前、確か私が三十歳のときです。うちで早川に地所を持っていてそこでやろうと思ったんですけど、ちょうどその頃に排水処理の問題がすごくうるさくなってきて、自分の

敷地の中できれいな水にして流さなければ駄目だというのです。その設備をするだけで敷地の半分くらい使ってしまうので、とてもじゃないけど工場できなくなったんです。

たまたま荒久に市の排水処理施設ができたんです。私費で浄化設備をつくってある程度浄化して荒久までパイプ敷いてそこに入れさせて下さいと市にお願いしたけど駄目だと言われてしまった。探し探しして静岡の方に行った。というのは、今でも原料問屋さんが静岡なんですよ。そこへトラックが着いたり、魚の頭切るのは今でも焼津の町の中で切ってるんです。

ですから、しょうがねえからいっそのこと工場持っていって蒲鉾つくってそれを小田原に運んじゃおうと、こういう発想に変えちゃったんですよ。小田原は売るところです。



## 店の看板は益田さん

川崎（長太郎）さん、いましたねえ。この建物（事務所）の半分から向うは川崎さんの弟さんが魚屋さんやっていたんですよ。長太郎さんはこの辺をきたない恰好でブラブラしてました。我々子供の頃はえらい小説家だとは思わず、きたねえオヤジだと思っていた。うちの親父たちは長太郎さんと親しくしてましたよ。

三浦しおんは妹の娘です。私のお袋が亡くなったときは何日か泊って看病してくれましたよ。彼女は「まほろ駅前」何とかで直木賞もらって、『舟を編む』でも賞をもらいましたねえ。本屋大賞でしたかね。

店の建物は関東大震災で焼けて、そのあと一年経って建てたものです。何年かに一回は手を掛けていますけれどね。大黒柱には上に（二階に）穴があいていて、中にクルミ油みたいなものを差すようになっているんですね。ツヤ出しというか、湿気を保つようになっているんです。

表の「加古清」の看板ですか。うちのおじいさんが板橋におられた益田（鈍翁）さんにお願いして書いていただいたものですよ。

## 私の思いを伝えたい

私は、今は自分で作って自分で売るという商売をしなきゃ駄目だなあと思っています。それは、自分がこういう思いでつくっていることを買って下さる方にわかっていただかないと、これを例えばスーパーに売ったり生協に売ってもその先どなたに物が渡るかわからないので、こちらの思いが伝わらないというもどかしさがあるんですね。

元々が小売りと、例えば築地へ品物を出荷するとか横浜、箱根へ持って行く卸の商売の両方だったんです。うちの場合は東京辺りに直接出るのがだいぶ遅くなったんです。というのは、この辺のところだけで十分に商売できていたからです。そうじゃない方は早くに東京へ出られた。お店お店でやり方があって、うちはそういう意味では直接外に出るのは一番遅くなってしまいましたね。東京へ出たのは私のおじいさんの頃から細々と出ているんですけど、そこをメインにして商売していなかったという意味です。

ですから、自分でつくって自分で売るところを拡げていって、自分がこういう思いでつくってますよ、こういう原料でつくってますよ、こういうかたちでやってるんですよということがわかっていただけるような商売にしたほうがいいと思っているし、息子（太郎）にもそういう話をしてるんです。

どこでもいいから売れればいいということになりゃ、今の世の中どうでも出来ますけれども、そればっかりが商売じゃないだろうと、私は思うんですけどねえ。

私はもう七十二歳で、あまり仕事やってはいけない、息子に任せなければいけないと思ってはいるんですが、ただ、今あんまり景気がよくないしね。ですから、つくること売ることに関しても、マイナスをある程度ゼロに戻すような手だてを尽さなければなと思っているんです。

陰でそういうことをしながら息子にバトンタッチできればいいかなと思っているんですがね。

（二〇一三年七月五日）

カット：田中　豊

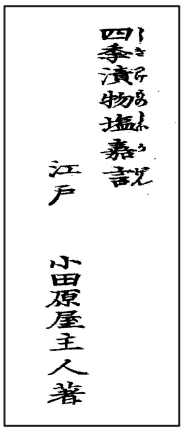
小田原の郷土史再発見

# 江戸の老舗小田原屋と北條氏直遺児伝承

石井　啓文（ひろふみ）

平成十七年末、拙著『小田原の梅』を刊行した。

その執筆中に、天保七年（一八三六）刊の『四季漬物塩嘉言（しおかげん）』という洒落た書名で、六十四種の漬物の漬け方を記した板書に出会った。挿絵も愉しいが、著者「江戸・小田原屋主人」に興味を持った。



『四季漬物塩嘉言』挿絵

**小田原屋主人とは？**　『国書総目録』等、いずれも小田原屋主人のみで姓名を記さず、判明しないまゝの脱稿となった。

過日、ふとしたことから漬物商「小田原屋」の建物が、箱根湯本の天山湯治郷に移築されていることを知りお訪ねした。

建物は女湯休憩室に利用されているとのことで、写真撮影は翌朝、開業前の許可をいただく。

壁に由来が掲げられていた。

**「小田原屋の由来**　東京神田にあったこの建物の【小田原屋】という名称は、歴史をさかのぼれば戦国時代北條氏の栄枯を印した小田原の地に由来するものです。

一五九〇年、豊臣秀吉の攻撃にあって小田原城の憂き目に至り、その後不運の死を遂げた北條氏直の娘を氏直付きの老臣小栗吉右衛門は、ひそかに連れ逃れました。還俗した当時わずかに二歳足らずであった姫は、吉右衛門に自分の娘のように育てられ、その後も剃髪して故郷を見ることなく独身で生涯を送りました。

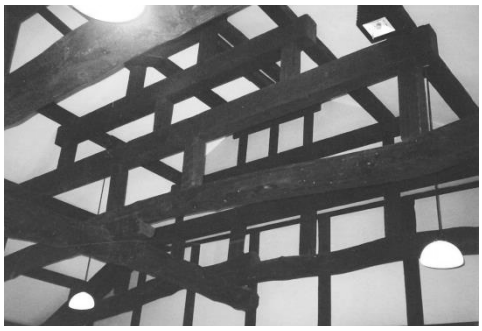
幾多の風雪に耐え、今日も商家の暖簾を守る小栗家の店舗であった建物が、この度北條一族ゆかりの地に移築保存される運びとなりました。

所有者の小栗弘三氏の御厚意に感謝いたします。」

北條氏直遺児伝承に驚かされ、天山支配人梶浦ゆかり氏に移築の経緯を伺うと「昭和六十一年、社長が新聞広告で小田原に縁のある漬物商小田原屋を知り、十七代小栗弘三氏（当時食料品店経営）から譲り受けた」と言われる。

関東大震災後の昭和二年の建築で、一部土蔵造り二階建、江戸の町屋様式を伝える大店造りである。露天風呂に入っての湯治場の雰囲気に見事なまでに馴染んでいる。

移築した建物



箱根湯本・天山に移築した建物の天井

この小田原屋の御子孫が神田連雀町（現須田町）に在住と知り、お尋ねした。改築された五階建ビルの二階壁面に填め込まれた「小田原屋本店」の右から横書きの墨痕鮮やかな厚板の看板は、年輪を感じさせる（後掲）。

以下は、こうして知った十八代小栗忠氏のお話と、東京の図書館等で調べた「小田原屋」と北條氏直遺児伝承の物語である。

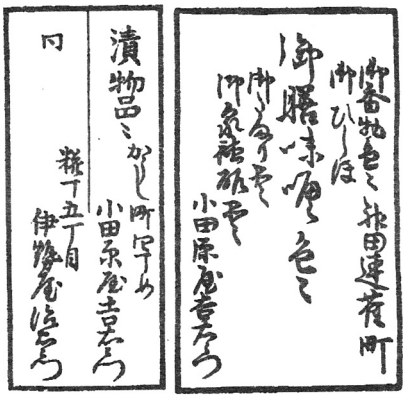
**味噌問屋から漬物商へ**

『大江戸趣味風流くらべ』（吉村武夫著・昭和五十一年刊）に、小田原屋十五代小栗寅雄の話がある。

「家康が慶長八年（一六〇三）に幕府を開くと江戸は次第に発展し、神田川べりに青物市場ができました。初代はそこに漬物の卸店を開き〔小田原屋〕と名づけました。元禄時代七代目のとき三人の子供を分家させ、一人は乾物屋、一人は室町に漬物屋を開かせました。商号は本店と同じ㊀を使用しました。室町の小田原屋は何代かのとき、早川家の養子になり代々早川佐七を名乗り、三越の前で人通りも賑やかで、日本橋・京橋の通りは東京一の繁華街になり繁昌しました。江戸時代の本店は吉右衛門、隣の乾物屋は兆兵衛、

室町佐七が世襲名である。」

天明七年（一七八七）板行の食料品・菓子店の同業者名簿でもある『七十五日』（初物七十五日」からの書名）に「神田連雀町／御膳味噌色々／小田原屋吉右衛門」があり、添書きに「御香物色々・御ひしほ・御たまり品々・御泉□酢品々」を記している。

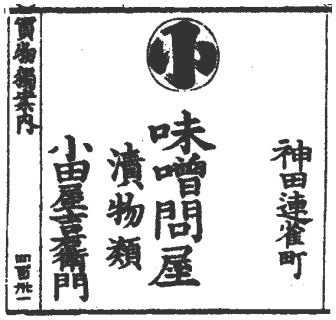


『七十五日』挿絵

これは看板を模写したのであろう。さらに「漬物品々／かうし町四丁め小田原屋吉右衛門」もある。この麹町小田原屋は、以後の史料には見られない。

太田南畝が文政七年（一八二四）、序文で江戸が大きくなり、どこにどのような店があるか、商品購入に便利なように作ったという『買物独（ひとり）案内』（中川芳山堂編）上中下巻を板行した。

小田（原）屋吉右衛門は校正ミスであろうが、味噌問屋で漬物類も扱っている。小田原屋本店は、当初は味噌問屋で漬物も扱っていたことが分かる。




『買物独案内』挿絵

残念ながら、資料に中巻が見られず漬物店は判明しない。このことは前記『七十五日』も同じであろう漬物屋の記載がなく、ここまで日本橋室町小田原屋は見られない。

乾物問屋に小田原屋長兵衛と小田原屋伊八がある。両者ともに屋号㊀は同じである。多町の伊八は、その後の史料にも見え、小田原屋の分家か暖簾分けであろうか。

『買物独案内』挿絵

圧巻は文政十年（一八二七）刊の『宝船桂帆柱（かつらのほばしら）』である。「十返舎一九作・歌川広重画」である。

漬物屋の暖簾に「小田原や」とある。漬物屋と言えば「小田原屋」・・・、江戸を代表する老舗であったことが知れる。

幕末の嘉永七年（一八五七）五月、幕府は「海防及皇居造榮等、多額ノ経費ヲ要スルヲ以テ、江戸市民ノ身柄相應ノ者ニ用金ヲ命ズ」として富商に用金を求めた。

「金七百両　連雀丁
　小田原屋喜（吉）右衛門
　小田原屋兆兵衛
金百五十両　室丁二丁目
　小田原屋佐七」
（『東京市史稿市街編』三十八）。

ここに初めて、「室町小田原屋佐七」が見えた。

以上の史料から、本店小田原屋は文政七年までは味噌問屋が確認でき、漬物屋に転業するのはそれ以降となる。既述の小栗寅雄の話は記憶違いであろう。

とすると、文政十年の『宝船桂帆柱』の「小田原や」は、本店の可能性は低い。

室町小田原屋が小栗寅雄の話通り元禄時代に開業していたとすれば、この絵は室町の可能性が高い。同様に冒頭に示した天保七年の『四季漬物塩嘉言』の小田原屋主人も、室町の小田原屋佐七ではないだろうか。

小栗寅雄の話で割愛したが、小田原屋佐七の漬物作りの「こだわり」も話していた。

次いで、明治十二年版『東京雷名商家番付集』（尾崎富五郎編）には、漬物の勧進元三名の内に、

「レンジャク　小田原屋
　ムロ丁二　小田原屋」

『宝船桂帆柱』挿絵

を記し、明治期まで小田原屋三店舗が大変繁盛していたことを窺わせている。

### 小栗兆兵衛と平将門供養碑

神田明神社は、大正十二年の関東大震災で焼失したが、十年後の昭和八年に一対の「獅子狛犬」が、神田青物市場の氏子八名により奉納されたことが、その台座裏に刻まれている。

「神田區連雀町小栗寅雄」と「神田區連雀町小栗兆兵衛」の名がある。その一年後に現・神田神社は再建された。

分家の乾物問屋小栗兆兵衛家に、次のような話がある。

東京都千代田区大手町一丁目一番地にある将門塚は、一名将門首塚とも呼ばれている。この地は、慶長八年（一六〇三）頃までは神田明神社があった所で、現・神田神社の旧跡地でもある。『神田明神史考』（平成四年刊）によると、この地が酒井雅楽頭邸であった時代は、将門稲荷という清麗な社で腰元たちが常に参詣していたという。明治四年、新政府は酒井邸の跡に大蔵省を設置したが、将門塚はそのまま構内に残った。

その頃の将門塚の様子を伝える織田完之著『平将門故跡考』（明治四十年刊）がある。

「大蔵省玄関前に古蓮池あり」に始まり「此の礎石は真教上人の蓮阿弥陀仏の諡号（しごう）を刻せし版碑を此の上に立てたりし事は疑うべくもあらず」として「其の版碑は何れへか紛失して今は所在を知らず。只一葉の搨本（とうほん）を神田の氏子総代小栗兆兵衛の家に伝えたるは実に徴古の験証なりとす」として、次のように記している。

「平将門の諡号は蓮阿弥陀仏である。徳治二年（一三〇七）丁未、遊行真教上人がこの碑を芝崎道場に建てた。これを文化二年乙丑（一八〇五）九月十五日に、神田山日輪寺の其阿（ごあ）上人が拓本二枚を作り一枚を自分の寺で保管し、一枚を私の家に伝えた。元の板碑はすでに失われてしまった。そこで田中長嶺に依頼し、拓本の文字を模して石に刻み、さらに不朽のものとしようとして大蔵省に献じたのは、亡父兆兵衛棟鎮（むねしげ）の志を継いだものである。

明治四十年二月

小栗万次郎撰

織田　完之書」

これを基に、明治三十九年（一九〇六）五月、紛失した徳治二年の板石塔婆を、大蔵省内芝崎道場当時の礎石の上に復元したのは、この織田完之と大蔵大臣・阪谷芳郎である。阪谷は、このとき史跡保存の要を告示すべく「故跡保存碑」を建立している。余談になるが、阪谷芳郎が友人二人と江之浦に「相翁松碑」を建立したのは、この三ヶ月前の同年二月である。

彼が大蔵大臣に就任したのが同年一月で、同碑は大蔵大臣就任を待っての建立と言えようか。

ちなみに阪谷の父・朗廬は一橋家の代官所（現岡山県井原市）が郷校興譲館（現興譲館高校）を設立すると初代館長に就任し、徳川慶喜に招かれている。小田原藩儒村上珍休は、興譲館を訪れ、朗廬の教えを受け、自著に師の「送序」を記している（『函峯文鈔』）。

この後、関東大震災で大蔵省は霞ヶ関に移転、第二次世界大戦等、幾多の変遷を経て昭和四十六年三月、将門塚は東京都の文化財（都旧跡）に指定された。

### 北條氏直の遺児伝承

小栗家菩提寺である浄土宗の源覚寺（文京区小石川）を訪ねた。墓域の中ほどに、ほぼ十メートル四方が石塀で囲われた小栗家墓地がある。観音開きの扉を入ると、中央墓誌の最初に「慶法院経譽貞壽比丘尼・寛文十三丑年（一六七三）七月廿五日卒・當家開基」を記し、台石に「小田原屋」とある。

當家開基とあり氏直姫君と伝えられる。寛文十三年は九月に延宝に改元された。天正十八年に二歳（天山「小田原屋の由来」）であったとすれば享年は八十六歳になる。

続いて、初代から六代までの当主と同妻の戒名が、台石にはこれも大きく「小田原屋」。この墓誌の左右に七・八代と、九代から十六代までが刻まれた二基の墓石もある。

江戸時代初期から続く代々の戒名が確認でき、単なる一商家とは思えない伝統の重みに圧倒される思いがした。

さらに「小栗栄次郎（文名虫太郎）」（乾物商小田原屋最後の当主で、筆名小栗虫太郎の推理作家）の刻銘のある分家の乾物商と、室町の早川家と思われる墓石のいずれもの台石に小田原屋が刻まれ、小田原屋一色の観である。ここは、小栗家一族の墓所であろう。

ところで、天山湯治郷説明板の北條氏直姫君の話は小栗家家伝で、氏直公の御位牌「松巌院殿大圓徹宗大居士」が、同家御仏壇に

源覚寺の小田原屋墓石

安置されている、と小栗忠氏は言われている。

しかし、徳川幕府編纂の『寛政重修諸家譜』は、氏直の子供は池田利隆に嫁いだ娘一人を記すのみである。

また、文化九年（一八一二）刊行の『小田原編年録』（間宮士信・著『編年録』と略す）などに、次に示す三男二女の伝承があった。

①北條善左衛門氏次入道安清、氏直子息ノヨシ（『編年録』）

②摩尼珠院殿妙勝童女、氏直御息女母神君御女（『編年録』）

③氏直息女チャウア姫十三ニテ早世（『編年録』）

④北條氏直子氏貞（宮城県柴田郡槻木町に墓）

⑤後北條氏遺児藤原某（宮城県亘理郡逢隈上ノ町の伝説）

これに小栗家で養育した姫を合わせると、氏直には歴史に記されない三男三女が遺児として伝承されている。

この内、近年②摩尼珠院殿が『集成北條氏系図』（黒田基樹作成）等に記され、氏直遺児は前記池田家に輿入れした姫との二女が定説とされている。

家康二女督姫の子としているのが①と②で、①の氏次については明治二十三年、早雲寺北條五代の墓地に墓石が建立されている。

小栗家の姫には母親の話は伝えられていない、と言われる。

いずれにしても、六名もの北條氏直遺児伝承があったことは、五代九十五年の小田原北條氏を惜しむ多くの人たちがいたことを物語っているのであろう。

## 後　記

『四季漬物塩嘉言』の著者である「小田原屋主人」が、本店の小栗吉右衛門か室町の小田原屋佐七と推定できたが、断定する史料は見つからなかった。

また、現在判明する北條氏の家臣に小栗姓も見られなかった。ただ、調査を通じて小田原屋には武家の素養が脈々と受け継がれていたように思えた。

明暦の大火（一六五七年）後にでき、徳川家御用達として繁栄を極めた神田青物市場（やっちゃ場）も、関東大震災後は昭和三年に秋葉原に、さらに平成二年には大田区へと移転した。今は須田町一丁目に、やっちゃ場「発祥之地」の石碑を残すのみで、その面影はほとんど感じられない。

味噌問屋に始まった小田原屋本店も、終戦とともに漬物商から酒屋、その後食料品店へと転業し、現在は時代を反映しているのであろう貸ビルである。

昨年七月、東京の史跡巡りで小田原屋を再訪した。神田駅ではなく、お茶の水から歩いたことから道に自信が持てず、須田町交差点手前で通りがかりの老婦人に小田原屋を尋ねた。

さすが年輩者・・・、小田原屋をご存じで教えていただいた。

連雀町から須田町へ、変遷する町の姿を「小田原屋本店」の看板は見てきており、これからも見続けて行くのであろう。

本稿は『おだわら風土記考』（第十号・平成二十年二月刊）に掲載したものに補筆した。

なお、北條氏直遺児伝承の①氏次は、以前から疑問視されており『風土記考』執筆中に、根拠とされる『小田原編年録』にも記された氏次墓（早雲寺墓碑の基）と台石が破却された、と『大坂狭山市文化財調査紀要』（平成四年刊）で知らされたことを記しておく。

おわり

小田原屋本店の看板

キャンパスおだわら学習講座≪公募型市民企画講座≫

**歴史講座　『小田原史談会セミナー』　第4回**

**日　時：平成２６年２月２２日（土）　午前１０時～１２時**

**場　所：小田原市民会館　５階第３会議室**

**講　座：**　「小田原史稿本」が記す歴史の真相シリーズ第１回

**「岡崎信康の切腹と大久保忠世」　講 師　石井　啓文氏（史談会会員・ｷｬﾝﾊﾟｽ講師）**

**申込先：☎ 33－1890（小田原市生涯学習センターけやきの会）定員 50 名（先着順）**

**費　用：500 円（資料代含む）　＊前回予約の方でキャンセルの場合は電話連絡をお願いします。**

## 最乗寺道了尊の再生に尽くした
# 曽比屋三代目辻村甚八郎

内田　清

### 飯沢村の人たちが最乗寺への入山を禁止される

嘉永三年（一八五〇）八月、大雄山最乗寺は、麓の「飯沢村の人びとは、出入りの職人は勿論、落ち葉拾いの子供まで入山を禁止する」と通達しました。境内と山林への立入り禁止です。

これは大変なことでした。足柄上郡飯沢村は最乗寺の奥に入会（いりあい）山があります。境内への出入りも通り過ぎも出来なくなると、飯沢村の人たちは入会山から草を刈って来て肥料や馬の餌にすることも、薪を取ってきて御飯を炊く事も、また、カヤで家の屋根替えをすることも出来なくなります。化学肥料もガスも無い時代ですから、解決が長引けばやがて生活ができなくなってしまうのが当時の世の中でした。飯沢村はなぜこんな事になったのでしょうか？

### 松平様の御霊屋材木ストップ事件

最乗寺には本堂（護国殿）の左手に開山道があります。その南脇に姫路城主で最乗寺の中興開基でもあった松平大和守直基公の高さ四ｍの大きな墓がありました（現在は鐘楼上に移転、南足柄市指定文化財）。松平家では徳川家康の孫で藩祖でもある直基公の墓の御霊屋（みたまや）が天明四年（一七八一）の大火で焼けたので再建を開始しました。ところが大事な材木を運搬途中に正規の道路（本道）で無い農道を通ったという理由で、飯沢村が差し止めてしまったのです。

それで最乗寺と関本村が小田原藩の役所に飯沢村を訴えました。飯沢村は「本道である炭焼所村（生駒）、中沼村、狩野村、飯沢村のルートを運搬せよ」と主張しましたが、問題解決までは関本ルートと両方を本道とするという事で前年の八月に調停が成立しました。

ところが飯沢村は一年たっても三本の材木を放置していたので、工事は進みませんでした。立腹した最乗寺が、境内出入りを禁止したのでした。

この事件には古くからの関本村と飯沢村の最乗寺を巡る対立が根にありました。一六七二年に差出された『飯沢村明細帳』には最乗寺が村内にあると書いています。事実飯沢村の地続きですが、一七〇〇年頃から「最乗寺は関本村の飛地」とされました。

矢倉沢往還（幹線道路）の宿場で旅人の為の旅籠や茶店があり歴史も古い関本村と最乗寺道了尊の関係は強まり、飯沢村は曲がり道の参道にされてしまったのです。御開山坐禅石上に据えられている安永八年（一七七九）建立の聖観音石像などにも「本来なら最乗寺は飯沢村のものである」という飯沢村民の主張がこめられているのかもしれません。

### 甚八郎、本道争いの調停にのりだす

小田原の商人たちの最乗寺道了尊の信者仲間に「小田原誠信講社」がありました。世話人総代の曽比屋辻村甚八郎は、一丁田（現在の浜町一丁目）を中心として古着・呉服に質屋（金融業）を営業する「曽比屋」の三代目当主でした。甚八郎と、同僚の宮前町（現在の本町一丁目）三右衛門は、嘉永四年（一八五一）五月二十八日の大祭の日に御山（最乗寺）あてに、関本村と飯沢村の本道争い仲介の願書を出しました。要点はつぎのようです。（『南足柄市史8・別編寺社文化財』No.242　426頁）

「近隣三村の名主による調停を守らなかったのは飯沢村の心得違いです。しかし飯沢村の山内出入り禁止も気の毒だと思います。争いが続くと御霊屋再建が出来ません。極楽寺や石方講中と私共小田原誠信講に調停をお任せ下さい。そうすれば残されている御材木は飯沢村の者たちと早速御山の普請小屋まで運びます。今後も心得違いのないように諭します。飯沢村の山内出入も前の通りにして下さい」（最乗寺蔵）

調停成立の文書は残されていませんが、この時甚八郎は五十歳です。最乗寺のシンボルでもある松平大和守直基公墓所の御霊屋が未完成では、天明・天保火災からの最乗寺再建事業における信心講中の杉苗寄進・植林等への影響も懸念し、調停に乗り出したと考えられます。

### 二十八宿燈と廿六丁目の「辻村夫婦（みょうと）杉」

最乗寺に百五十年を迎えようとしている常夜灯があります。道了尊参道の終点、円通橋下の総高二九七㎝の石灯篭です。この灯篭は地上高一二〇㎝前後の丁石と呼ばれる道標二十七基を総括する灯篭です。正面には「軫（しん）廿八丁目」、他の三面には小田原

誠信講社の辻村陳質（じんしち）が書いた『最乗寺阪路埃碑記（はんろこうひき）』が刻まれています。陳質は甚八郎の号です。二十八宿燈の趣旨はつぎのようです。

「当山の参道は凡そ二十八丁ある。小田原誠信講の仲間はお金を出して石の道しるべを建てた。頭に穴を掘り、灯篭にして油をともし、闇夜の祭りの参拝者の為に日が沈み月が昇らない間を照らす、二十八宿の徳の高い神（星）の名をつけた。笑うなかれ。明燈を奉じ、道了権現に手を合わせれば、本当の知恵を開く事が出来るに違いない」

道了尊の祭典は、旧暦の二十七・二十八日ですからほとんど闇でした。点灯は狩野村の若者組が請け負っていました。夜の祭典、真夜中の御供（ごくう）式の為に登山する信者を安全に導くと共に、神である道了権現が、単なる物理的な光だけでなく「二十八宿の明徳」に加えて人生の知恵を得るための道に導いて下さるとの意味をかけた、格調高い名文だとの説もあります。（平塚市博物館『星々のみちびき』）。

「軫廿八丁目」常夜燈

「二十八宿燈」建立は嘉永六年（一八五三）の大地震で境内が崩壊した道了権現（道了宮）を、大雄川を越えた最乗寺奥の広い適地（現在地）に移転して、寺と一体化した新しい宗教活動を展開しようとした最乗寺の方針を支援する事業だった、と考えられます。

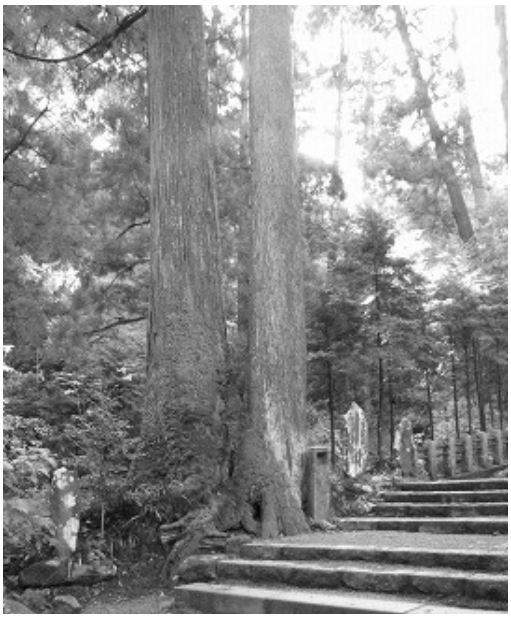
安政四年（一八五七）に移転・再建された道了大権現は、明治維新による廃仏毀釈（仏教排撃）の嵐の中で道了大薩埵（さった）と改称して見事に乗り切った大雄山最乗寺の基盤つくりとして大英断でした。この移転に当たっては辻村甚八郎の助言があったかもしれません。今後の研究課題でもあります。

小田原誠信講社が元治元年（一八六四）に建てた「二十八宿燈」は十二基が現存します。それでも講仲間に小田原藩士や近在の名主・村民までがいたことがわかります。幸い総代の甚八郎の燈は残っていました。「張（ちょう）廿六丁目」灯は「壱丁田町　辻村甚八郎」の実名で夫婦杉の根元に立ててあります。私は紛争調停や二十八宿灯で最乗寺のために働いた甚八郎に、さらに一働きして欲しいと提案しています。

それは「大雄山の杉林」の特色である「夫婦杉＝相生杉」のPRと結び付けて「辻村夫婦杉」と名付けたらどうかということです。

特に「辻村夫婦杉（胸高周囲七八〇㎝）」は根元に「張廿六丁目」灯を抱えているだけでなく、太さ・色共に夫婦杉にふさわしく、隣に寄付者無名の「杉苗七萬本寄付」碑があります。しかも開山座禅石前の相生橋を渡って左折する角に在るので、ここに名札或いは案内板を立てれば名所の一つになるはずです。

「大雄山の杉林」には二木・三木合体の奇木が約三十組、高さ五〇m以上で神奈川県最高の高木がぞろぞろあるのも特色です。これ等に「二代目相生杉（六二〇㎝）」・「一木三本杉（七四〇㎝）」等と名付けてその特色をPRしていく先駆けになるでしょう。（『史談足柄49』「大雄山の杉林十の謎」）


「張廿六丁目」にある夫婦杉

## 小田原藩を救った三代目甚八郎の研究はこれから

明治二年（一八六九）三月、辻村秩作（ちっさく、三代甚八郎の隠居してからの名）と四代目甚八郎は小田原藩から永代扶持をいただきました。

「前略…世上不融通の中、速に調金に相及び、なお今般御時節を深く恐察（きょうさつ、すいさつ）莫大の金子献上いたし候段、古今未曾有の事共にて御逼迫の折りから廉々（かどかど）ご都合に相成り候。…後略」（読下し）

戊辰戦争で不始末をした小田原藩は極度に金融につまっていました。この時に莫大な金子を献上してくれた辻村家の行為は、昔から今迄にない事だったと感激した藩では、破格の措置として、

五人扶持を永代（永久）に支給すると同時に、久野村坊所の御林（おはやし・藩の林）八反壱畝余を永代に預け、さらに三幅対（さんぷくつい）の軸までを支給しました（『小田原市史』（近世史料編No.３１１）。坊所の御林は現在の「わんぱくらんど」辺でしょう。辻村家が後に大山林地主に発展する種が蒔かれたと見てよいでしょうか。

三代目甚八郎は、一八六四年、すなわち「二十八宿燈」を建立した年に、陳質の号で中島村（現中町）の、星信仰ゆかりの妙見堂にある成貞尼歌碑に和歌を寄せています（「小田原の金石文一」二六頁）。当時の小田原を代表する文人でもありました。壱丁田町（現浜町）の宝安寺にある墓石には

あすありとおもふ心のなかりせば
などかいとわむ花の夜あらし

と辞世が刻まれています。没年は明治十五年（一八八二）十一月十五日、法名涼心庵陳質寿翁居士。八十三歳とあります。

三代目はとかく家をつぶす例が多いようですが、甚八郎は一八三〇年に奉公人取締規定を作って質屋中心に経営を拡大して小田原一の豪商と呼ばれるように成功しました。文久三年（一八六三）には宿老となり、名主たちを指揮して町奉行と共に小田原宿の町政を行う町年寄（三人制の町長）となり、本業でも藩の御用達を勤めました。

「やかまし屋で、けちな旦那」との評判もありましたが、明治四十三年（一九一〇）の吉田義之著『実業立志編』によると、貧乏人を救うとか道普請の費用などには惜しみなく金を出したので、「金満家・倹約家・陰徳（知れないように施す）家」として子どもにまで知られていたとのことです。

しかし不思議なことに『神奈川県史』人物編は勿論のこと『小田原市史』通史編にも三代目辻村甚八郎の名は出てきません。三代目甚八郎はこれから研究されるべき人物なのです。

ところで本誌前号・前々号の藤平初江氏の論考を大変嬉しく思いました。安易な伝承や推測によって辻村家の本家を徳兵衛家としてきた説を、丹念な資料操作で見事に喝破され、「本家は繁右衛門家」と訂正されたのはさすがです。しかしまだ、分家の時期、曽比村移住、報徳仕法の実践をはじめ、沢山の課題が残されています。私も今回は、一般向けの文にしてしまいましたが、研究論文を書かなければ、と自戒しています。ともども頑張ってみましょう。

## 辻村　甚八郎　略年表・史料（注：下記『市史』は全て『小田原市史』史料編近世Ⅲ藩領2を示す）

| 西暦 | 和暦 | | できごと | 史料 |
|---|---|---|---|---|
| 1784 | 天明 | 4年7月19日 | 最乗寺全山大火消失 | |
| 1800 | 寛政 | 12年 | 3代目辻村甚八郎生まれる | |
| 1828 | 文政 | 11年3月18日～5月22日 | 太々講60人と伊勢・金比羅・大坂・京都旅行 | 自筆『伊勢太々講道中日記』 |
| 1830 | 文政 | 13年 | 辻村甚八郎家奉公人規定をつくる | 『市史』 No.129 370頁 |
| 1840 | 天保 | 11年11月29日 | 最乗寺全焼 | |
| 1851 | 嘉永 | 4年5月28日 | **松平廟御霊屋材騒動仲介**願書提出 | 『南足柄市史』⑧ No.242 426頁 |
| 1853 | 嘉永 | 6年2月2日 | 小田原大地震　道了権現（道了宮）境内崩壊 | 結城光昭『箱根の日記』 |
| 1857 | 安政 | 4年 | 道了権現の現在地移転再建 | |
| 1863 | 文久 | 3年7月10日 | 窮民救助で紋付上下を下される<br>これ以前に、苗字を許され町年寄格となる | 『市史』 No.253 690頁 |
| 1864 | 元治 | 元年5月 | 辻村陳質・本久寺妙見堂成貞尼碑に歌をよせる<br>**「小田原誠信講」が「二十八宿燈」を建立** | 『小田原の金石文』26 |
| 1864 | 元治 | 元年12月 | 数十年来お金肝煎で、加扶持・孫一代苗字使用可 | 『市史』 No.259 701頁 |
| 1867 | 慶応 | 3年12月26日 | 辻村秩作に宿老・人足肝煎、御用達、<br>在役中扶持6人分支給 | 『市史』 No.301, No.302 751頁 |
| 1868 | 慶応 | 4年7月 | 辻村秩作に御垢付小袖、お料理金1,000疋支給 | 『市史』 No.308 770頁 |
| 1869 | 明治 | 2年3月 | 辻村秩作は**古今未曾有の金子献上**で永代五人扶持・坊所の御林をくださる。他に年不詳の褒め状3点 | 『市史』 No.311 779頁 |
| 1870 | 明治 | 3年 | 町年寄を辞任 | |
| 1882 | 明治 | 15年 | 83歳で没（墓石） | |

# 中村湾・中村潟そして「中村湖」

梅田　仙吉

中村郷の大先輩である郷土史家、竹見龍雄氏の提唱された「中村湖」について、その草創期と経緯を調査した。

私たちの住む神奈川県西部（**図1**、**図9**）は、フィリピン海プレート、北米プレート、ユーラシアプレートの境にあり、千数百万年前から活動的な地域となっている。現在のフィリピン海プレートとユーラシアプレート、北米プレートの境界は、相模湾から足柄平野、酒匂川流域、駿河湾を結ぶ位置にある。プレート境界附近では、現在でも活動中の断層が沢山形成されている。大磯丘陵の西縁にある国府津―松田断層や丹沢山地の南縁を通る神縄逆断層などその代表例である。

そして、大磯丘陵は国府津から大磯の高麗山、北部は秦野市に亘る広域な丘陵地帯で中村川（二宮町、小田原市中村原、中井町）、葛川（二宮町・大磯町）などが丘陵部の低地を相模湾に流れ出ている。

私が小田原市の最東部大磯丘陵の中ほど、中村川の近くに転居してきたのは40数年前である。当時ご健在でおられた竹見龍雄氏の「草燃える史跡巡り（昭和56年）」の資料を見たときから、「中村湖」について興味を魅かれ今回その歴史を知りたく真相を確かめて見たいと思ったのが切掛けとなった。

## Ⅰ大磯丘陵の成り立ち

大磯丘陵は文献によると相模湾にある沖ノ山推列の一部が陸上に顔を出したものと考えられている。約30万年前以降に隆起を始め、15万年以降に国府津―松田断層の活動により急激に隆起したそうで、北西方向にフィリピン海プレートが進行しながら、国府津―松田断層が活動し、大磯丘陵が隆起すると云われており、フィリピン海プレートの進行により、北西―南東方向の弱線に東伊豆単成火山群や東伊豆沖海底火山が形成され、これにより真鶴マイクロプレートが北方へ移動し、本州へ潜り込むことにより国府津―松田断層が動き、大磯丘陵が隆起していると考えられている。

## Ⅱ中村湾から中村潟へ

このように隆起が著しい大磯丘陵であるが、別な視点から見ると地球の最終氷期は2万年前で当時の海岸線は現在より120mほど低く（**図2**、**A**）、1万年前ごろから温暖化が始まり6千年前（縄文前期）の最も暖かい時期には海面は現在に比べ約4m上がり（**図2**、**B**）湾内が広く形成され、沖積層といわれる土砂が湾内に堆積されていった。

この縄文時代の海進は中村川沿いの小田原市下中の禅龍寺前の崖から約50種類の貝の殻が採集され、また二宮町でも葛川を中心に海水が入り中里、元町など二宮町の市街地を造っている低平な地域の地下から海底の比較的浅い所に住んでいる貝が井戸堀にともない出てきている。

禅龍寺前の崖は、私が転居して来たころは確かに貝殻の混じった崖が見られたが、現在はコンクリートブロックで固められ見ることは出来ない。これらの事実は縄文海進時には中村湾となり現在の海岸線から3千mぐらいまで海水が入り込んでいたと思われ中村湾の様子が想像できる。（地球博物館「+2℃の世界」の資料など **図5**）

その後大磯丘陵の隆起は、「内陸活断層モデル化の研究」（千葉大理、宮内崇裕、伊藤谷生、東大地震研佐藤比呂志の各氏）などの前羽地区掘削調査の研究成果で、海岸段丘の離水過程からみた国府津―松田断層の活動履歴が明らかになり、国府津松田断層の上盤隆起側に相当する大磯丘陵の南岸には、6段の離水海岸地形が認定された（**図3**、**図4**）。

これによると（Ⅰ）5千年以前8m、その他（Ⅱ）5千～3千年前に4m、（Ⅲ）3千年前前後に

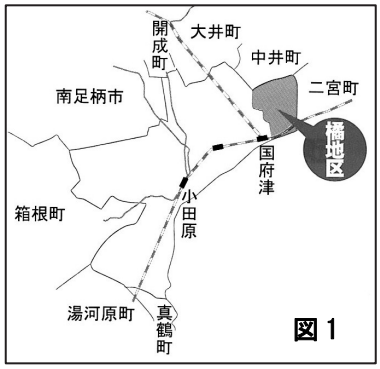



**図1**

「たちばな散策ガイド」より
（橘商工会まちづくり隊発行）

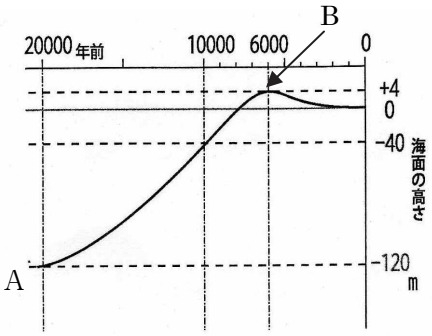



**図2　海面の高さの変化モデル図**

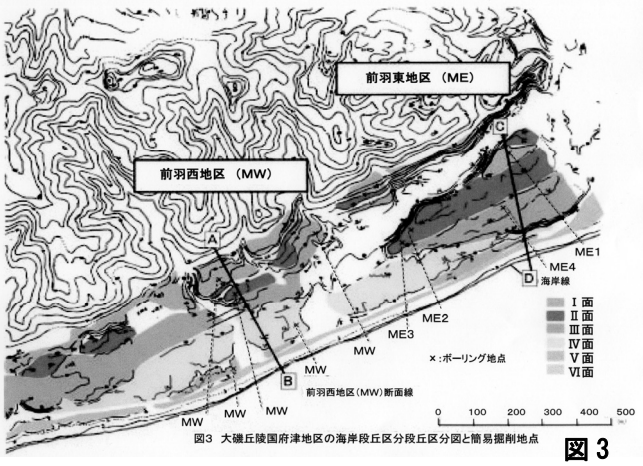



図3

大磯丘陵国府津地区の海岸段丘区分 段丘区分図と簡易掘削地点

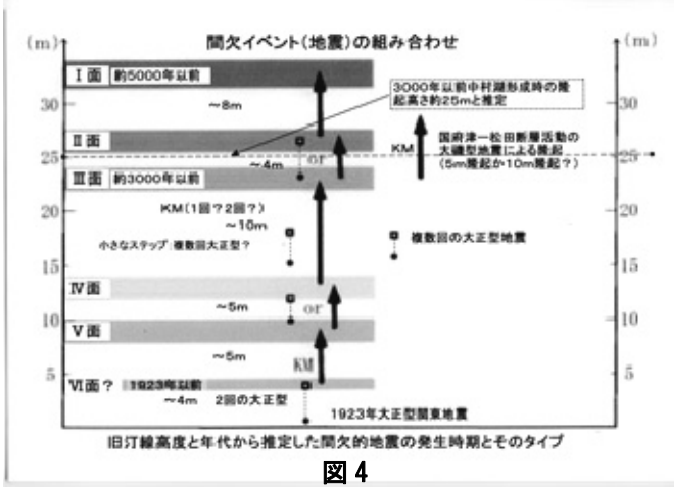



図4

前に5m、（Ⅴ）8百年前前後に5m、（Ⅵ）8百年前～大正12年年までに2m、最近の大正12年（1923）2m、の隆起があったと報告され、押切り付近は28m位の隆起があったと思われる。

この縄文海進以降低地部の中村川付近は以下のような75百～65百年前に中村湾となり、その後前記のような大磯丘陵の巨大地震の隆起により、55百年前の**図6**のような海水の中村湾から、汽水湖の中村潟に変わって行ったと推測できる。

## Ⅲ「中村湖」の発生時期

前羽地区の掘削調査資料から推測すると、3千年前ごろには現在の押切付近は20数m隆起し、その後も隆起が続き28m位まで隆起して、完全に陸地化されて「中村湖」の誕生となったと思われる（**図7**）。そして「中村湖」からの水は前川東地区の掘削調査でも分るように現在の橘支所から前羽小学校付近の山側、現在の東海道線山側の低地部を西方に流れ現在高層マンション下の関下川から海に流れ出ていた。この川の名は厩川（うまやかわ）と云われ、現在の前川の名はこの厩川の訛りであるとも云う。

なお**図7**は、前述の資料（図3、図4）に基づき前羽地区の海岸隆起を現在の海水面より22mと想定、国土地理院1／2万5千の地形図（等高線20mと30mより22mを類推）より作成したものである（平成19年作成）。また、中村原の県道に沿った部分は海抜20m前後で雨季などでは湿地帯となったと思われる。

## Ⅳ「中村湖」が消えたのは

鎌倉時代初期の箱根山越えは足柄道であり、現二宮町方面からの鎌倉古道は吾妻山の北側石坂から釜野に降り、川勾神社から禅龍寺を通り、山西の光福寺、そして池上（「中村湖」の北限）で中村川を渡り殿ノ窪（現在名、鳥ノ窪）、将軍山、六本松峠、曽我の里、へと続いていた。また禅龍寺の北側、道場（地名）には「中村湖」の渡し場（船取場、いまでも確認できる）があり、反対側の船着き場は小船あたりらしいが確認できない。これらから鎌倉時代までは「中村湖」、あるいは湿地帯（ある所は水深が数メートルあり他の大部分は湿地帯で季節や雨季などには湖面となった）であったと思われる。

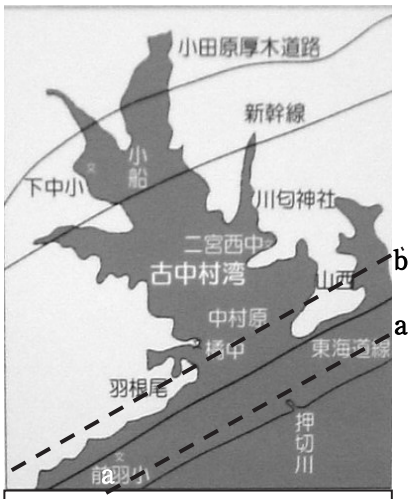
そして明応7年（1498）に発生した明応地震（東海地震）は静岡県御前崎沖数1万m海底、M＝8・2から8・4死者3万～4万人以上と推定され、津波による大きな被害、浜名湖が海とつながる、鎌倉高徳院の大仏殿が押し流された、など各地に大きな被害が発生している。この地震で「中村湖」付近でも崖崩れが発生し、前出の厩川は橘中学校の南側で堰き止められた（**図8**）。そして出口の無くなった「中村湖」は水位があがり、南方に発達していた砂丘を押し切って直接海に流れ出た。『新編相模国風土記稿』には次の記事がある。「古は村内字根からみに堤ありて、曲流し西隣足柄下郡前川村に注ぎしが、中古水溢れし、彼堤崩壊せし後今の水路となれりと云」。この明応地震で「中村湖」が消え今の姿（**図9**）になったと考えられる。

そしてこの「中村湖」の存在は、平成10年～11年の羽根尾工業団地建設に伴う発掘調査により発見された羽根尾貝塚により裏付けられる。相模川以西の神奈川西部では平塚市万田貝塚、五領ヶ台貝塚に次ぐ3例目、しかも泥炭層の貝塚としては県内初めてとなるこの貝塚の場所は、ちょうど中村潟の岸部に位置し、中村湾・中村潟・「中村湖」の実証がなされたと考えられる。

なお鳴門教育大学教授の奥村清先生は志澤選氏の「禅龍寺北（高度25m）に湖の渡し場があった。」との談を基に「中村湖」の想定図を作られている（『二宮町史（平成6年発行）』）ことを付記させていただく。

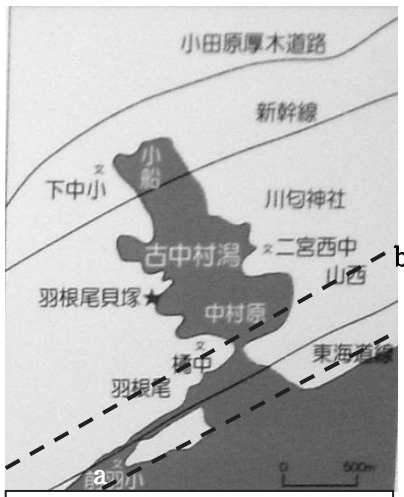
（史談会会員　小竹在住）

中村湾 → 中村潟 → 「中村湖」



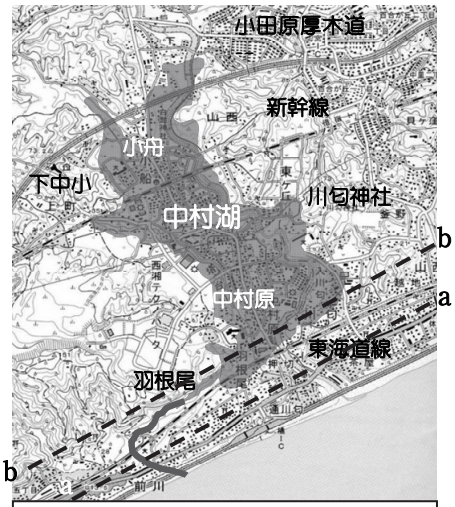

7500年前～6500年前

図5




5500年前

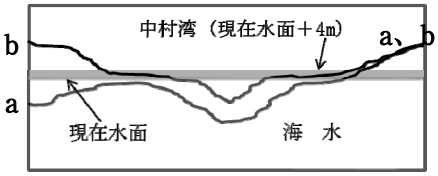
図6

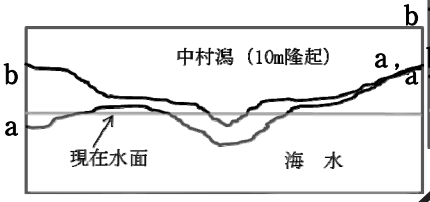


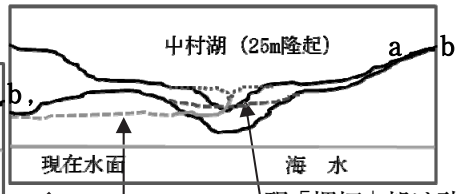

3000年前～500年前

図7

図6，図7はタウンセンター「こゆるぎ」にある
羽根尾貝塚展示資料




厩川水位

現「押切」部は砂の吹き上げ等により更に隆起

大地震による厩川堰止及び砂丘部決潰

明応7年大地震時（1498）

図8

中村川生成

現在

図9

厩川（中村川）が山崩れ（崖崩れ）で堰き止められたと思われる地点（浅間神社の裏手付近）
右手押切り方面から来た線路沿いの道は小屋の付近を中心に盛り上がっている。

**広報委員会より**

旧橘地区の小田原史談会会員には故竹見龍雄さんの薫陶を受けた方が多い。その方々を中心に約一年前から橘地区の郷土史を見直してみようとグループ活動が始まった。本稿を皮切りに「中村一族」「古道」「廣宣寺と大塔家」について順次掲載する予定です。ご期待ください。

# 小田原大秘録（巻一から巻三までの読み下し文）

## 第六回　巻二の三

鳥居　泰一郎

### 元禄十六年（一七〇三）忠増治世の時元禄大地震が発生、江戸城の被害は著しかった。小田原からの使者が大久保藩江戸屋敷に来て「江戸以上に被害が甚大で天守、町屋まで破損・出火した」と告げる

今年十一月廿二日夜、快晴の天気ありける。折節、星の落ちるを見て大変ありとて六部の乞食霄（しょう・夕方）立す。いかなる事かと思いけるに、巳の刻、大地震して所々の家潰れ及び大破、江戸御城殊の外破損して大地凸凹になりたる所も之有ける。

御上屋敷、東侍長屋、表通り、腰板離れ壁残らず落ち候。之に依って板囲い致さず候処、表通り幕を張り、その他所々半潰れにて破損之有、夜明けまでゆり止まず、併せて小田原より殊の外軽し東侍長屋にて怪我人。

田中源内方にて娘二人、下女一人死す。竹田検校方にて内方一人、娘一人死す。金成惣右衛門方にて中間三人死す。鳥居新右衛門方にて中間弐人死す。安見又市方にて中間二人死す。

右御長屋に之有輩、手廻りよく、欠け出し候ものは別条無。只一足の遅速にて怪我之在候。殿様大手御門御勤め遊ばされ候節故、早速御番所へ御出で遊ばされ候処、大手御番所にて箸村籐七死す。西御番所壁落ちかかり、此の外は別条無。

御城内外も御破損之有、桜田御番所、大手後ろ御勘定所、御畳蔵、新馬立、和田倉番所、馬場先御門と御番所潰れ、人大勢損じ申し候由、右の外所々潰れ、人損じ候由、住居相成らず趣に候。

同廿三日夜八つ半時、小田原より梅原九郎左衛門参着。小田原江戸、同じ刻夥しく大地震にて、御本丸、御天守、二の丸、御屋形初め、侍屋敷、町屋等まで一宇も残らず悉くゆり潰し、其の上所々の潰れ家より出火致し、御天守を初め、御本丸御屋形、二の丸御屋形残らず類焼。其の外侍屋敷幷町屋等まで余程焼失の由、小田原は江戸の十倍強く揺れ候由。

同廿四日朝。小田原より渡辺十郎左衛門参着。同昼、佐久間三右衛門参着。小田原大地震の儀御書付を以て、御届け遊ばされ候次第。

### 使者は小田原城・侍屋敷・町屋・箱根往還等建物・道路の損壊、死者数の詳細を報告した

一御天守崩れ候。以後類焼失仕り候。

一本丸御殿残らず崩れ申し候。以後類火焼失仕り候。

一二の丸屋形残らず崩れ申し候。以後類火焼失仕り候。

一二の丸侍屋敷残らず潰れ申し候。同所侍屋敷五軒類焼仕り候。

一　本丸、二の丸、三の丸、櫓幷門塀、石垣共大方崩れ申し候。

一外曲輪、侍屋敷残らず潰れ申し候。内拾四軒焼失仕り候。

一御城廻り幷曲輪の堀残らず埋まり申し候。

一往還、町屋残らず潰れ申し候。右の内通半焼失仕り候。

一御高札焼失仕り候。

右は十一月廿六日御届け遊ばされ候趣なり。

一箱根往還道橋所々崩れ、馬の通路溜り申し候。歩行持にて荷物など持ち越し候に付、早速人足差出道作り遣わし申し候由、小田原より申し越し候。

一箱根御関所、湖水の方へ七八寸程傾き申し候。其の上所々破損仕り候。

一柵、六七間ほど倒れ、其の外石垣所々崩れ幷柵木など所々損申し候。

一根府川御関所、御番所破損仕り候幷石垣残らず崩れ申し候上、柵残らず倒れ申し候。

一根府川への道筋山際崩れ、早馬の通路成り難い所も之有候。

右は同月二十八日お届けの趣なり。

一侍拾九人相果て申し候。小役人四人相果て申し候。歩行侍九人相果て申し候。足軽拾三人相果て申し候。家中女八拾六人相果て申し候。家中召仕男弐拾壱人相果て申し候。侍屋敷残らず潰れ、其の上拾九件焼失仕り候。

一城下町屋残らず潰れ、其の上四百八拾四軒焼失仕り候。

一町屋にて相果て候男女、六百五拾壱人、内男弐百八拾九人、女三百六拾弐人。同所旅人男女四拾人相果て申し候。内男三拾八人、女弐人。

一馬拾五疋損じ申し候。内九疋御傳馬、四疋家中馬、弐疋通り馬。

一足軽家残らず潰れ申し候上、六拾四軒焼失仕り候。

一府内寺社山伏の潰れ家、四拾弐軒。内潰れ候上、五ヶ寺焼失、出家弐人、女弐人相果て申し候。

右は同月二十九日御届け遊ばされ候趣なり。

一相州領分、郷中潰れ家四千六百拾六軒、同焼失家八軒、相果て候男女六百拾三人、内男四百七

人、女弐百六人。
一牛馬五拾七疋損じ申し候。内馬五拾六疋、牛壱疋。
一箱根小田原町潰れ家四拾七軒、同所にて相果て申し候男女十八人、御傳馬三拾六疋損じ申し候。
一駿州領分、郷中潰れ家八百三拾六件、内三拾六人相果て申し候。内男廿人、女十六人。内馬三疋損じ申し候。
同日御届け遊ばされ候。

一相州の内、郷中潰れ家千六百四拾六軒、相果て候者男女百三拾三人（ママ）、内男三拾六人、女六拾七人。
一同寺社潰れ家弐百三拾三軒、相果て候男女拾八人、内出家拾人、男四人、女四人。
一損じ馬二拾三疋。
一豆州の内、郷中潰れ家四百七拾三軒、相果て候男女六百三拾九人、男弐百四拾六人、女三百九拾三人。
右豆州片浦筋地震の節、大波打ち上げ家波に引かれ相果て候者、別して数多く之有候。
一寺社潰れ家九軒、相果て候男女四人、出家弐人、男壱人、女壱人。損じ馬六疋、駿州の内、寺社潰れ家拾九軒、相果て候男女壱人。
右者十二月三日御届け遊ばされ候。

小田原より箱根境目まで道筋、所々大石ころび落ち、馬の通路御座なく候。別して湯本茶屋より須雲川までの内欠落あり候所之有、其の上、崩れ大石ころび馬の通路は勿論、歩行荷物も漸々持ち越申し候。須雲川の前観音沢と申す所、山之上より石土落ち、今に少々の地震、度々石幷土落ち申し候。箱根まで所々へ落ち之有候大石の内、大きなるは七八尺、横五六尺程の石も数多く之有候。道の内所々地に響け土を砕き申し候。
一三嶋の馬、箱根御関所御門までは相越、それより下りは馬通路相成らず。登りは湯本まで通路之有。それより上りへは成らず候。
一小田原往還。町中に之有候。水道崩れ込埋まり候て、其の上を幅八九間程、川の如く町中を水流れ申し候。
一塔ノ沢、宮下、底倉、木賀まで右湯場筋潰れ候て湯御座無く候。
一領分足柄道。豆州道其外郷中筋に至るまで大破、奥山辺は大分崩れ申し候。
右同日御届け遊ばされ候。

### 小田原家中関係の死亡者詳細

一小田原家中にて損じ候人の覚え。
日下部春右衛門従弟、源内死す。大沢善左衛門死す。関小左衛門内方死す。西浦丹助母死す。山田弥一左衛門方にて岡庄八死す。同乳母死す。相馬貝之丞弟源次郎死す。同乳母死す。佐久間三右衛門女房死す。河村元右衛門下女死す。内海養元娘死す。山本儀右衛門内方死す。娘死す。宮川三也夫婦死す。石川久左衛門姉死す。松尾伊左衛門死す。同曾大夫妹死す。松山市内方にて岡道之助幷娘うば死す。吉田左次大夫下女死す。鈴木久大夫方にて岡虎之助死す。同乳母死す。大林佐左衛門死す。磯田平内娘死す。草場庄次郎死す。長谷川新左衛門死す。河合惣左衛門下女死す。金成惣右衛門下女死す。星野徳左衛門幷子壱人死す。河原崎徳兵衛母死す。杉浦平大夫家来十八人死す。内男十人、女八人。大久保右衛門兵衛家来壱人死す。寺井卅右衛門母死す。御用所御門番中間壱人死す。山本十右衛門下女壱人死す。黒柳友次郎母死す。近藤庄右衛門死す。娘壱人死す。下女壱人死す。草野院死す。川添寛助死す。川上森右衛門死す。武藤儀兵衛母死す。青木森右衛門夫婦死す。棚橋半七伯母壱人死す。村越平左衛門下女壱人死す。日治助兵衛内方死す。服部儀左衛門下女死す。廣仲伊右衛門祖母幷福地仁兵衛娘死す。服部十郎兵衛家来六人死す。辻七郎左衛門下女三人死す。大久保武大夫次男与次郎死す。同若党壱人、下女五人死す。中根弥五右衛門次男幷下女死す。前田徳左衛門死す。永岡小左衛門妻死す。大嶋市野右衛門妻死す。梅村弥兵衛下女壱人死す。角田丈右衛門娘死す。蜂谷大右衛門下女死す。武藤半右衛門下女死す。山中久内家来、母幷娘死す。板倉理右衛門下女死す。竹内藤右衛門下女弐人死す。山越夫左衛門娘死す。畔柳門兵衛下女死す。篠窪孫左衛門下女死す。

### 災害時、貴重品を無事に持ち出した三人はその働きにより御番帳入りした

一小田原御城内武具馬具等初め、其の外御家の武具、御宝物、御書物残らず焼失。此の中、御旗三拾流、妙の字吹流し、蝶の羽の御馬印、唐の頭斗り相残り、是は御本丸遠見番所、御旗組相勤め候当番、近藤弥右衛門組大須賀丹右衛門、田中伴兵衛、田口彦六、右三人相勤め候内、丹右衛門儀は、遠見番掛り弐人は御本丸の御番に之有候ところ、右地震の節、御天守へ漸々掛け上り、蝶の羽の御馬印を持って、上段より飛びおり候。其の後、小峰曲輪の方へ傾き、洞掘へ倒

落候得共、丹右衛門は芝原へ御馬印を以て死す。右伴兵衛、彦六弐人は、常盤木御門脇御櫓に之有候を取出し申し候。之に依って右三人御取立て遊ばされ候。大須賀丹右衛門倅へ二十石三人扶持下置かされ、御番帳入り仰せ付けられ候。田中伴兵衛拾五石三人扶持、御番帳入り、田口彦六、七石三人扶持にて御徒仰せ付けられ候也。其の時の働き軽重に御吟味遣わされ、右の通り甲乙之有候。

一加納文左衛門へ新地百石下置れ候。是は地震の砌諸事形宜しきに付いて也

### 忠増が小田原に入る

一十一月二十七日。御番交代、真田伊豆守様へ御引渡し之有候ところ、今晩御老中様より御連名の御奉書至來、御用の儀之有る間、明廿八日御登城遊ばされ候処、小田原地震にて大破の段、上聞に達し御懇の上意を以て小田原へ御暇仰せ出され候。

一御拝借の儀、御用番小笠原佐渡守様まで御願い仰上げられ候ところ、早速、金壱萬五千両御拝借仰付為され候。御城へ召し為され右の段仰せ渡され候。

一十二月五日、小田原へ御発足。御持鑓弐本、御長刀斗り、其の外御供廻り、随分、御人少にて御越し遊ばされ候。小田原に於いて元蔵内御仮家出来御座なられ、箱根、根府川両関所御見分相済、其の外諸事仰せ付けられ候。同月廿二日。御帰府の御礼、仰せ上げられ候。

一小田原往来共に夜通し御越し

一小田原従り、公儀箱根道筋御見分の為、小長谷勘左衛門様遣わされ候。

### 江戸各地を修復した者たち

一江戸御城廻り御破損に付、石垣御手伝い仰せ付けられ、西の丸残らず、松平大膳大夫。

一外桜田御門。半蔵御門。田安御門。小屋場。西の丸大手屋敷前、桜田御門外堀端。松平右衛門督。

一大手の辺幷食違い。百人組御門。中の御門。御玄関前通り。此の外小屋場。一ツ橋外明地。立花飛騨守。

一和田倉御門。馬場先御門。日比谷御門。内桜田御門。溜池小屋場。八代須河岸。丹羽左京大夫。

一上梅林坂。下梅林坂。平川口御門幷帯廓。此の通り北、竹橋。平川口へ小屋場。北の丸。三澤上総介。

一常盤橋より神田橋まで。右の内神田橋は年内御修復。松平遠江守。

一一ツ橋より雉子橋まで。数寄屋橋より鍛冶橋、呉服橋まで。稲葉能登守。

一常盤橋御門際まで、内川岸通り、龍の口、数寄屋橋、呉服橋まで、内川岸小屋場。翌十七年申正月廿二日、上杉民部大輔召為され、御城廻り石垣御手伝い仰付けられ候。

### 忠増は死者を弔う為谷津に慈眼寺を建立する。大方破損した城の再建を危ぶむ声が多かった。大河内茂左衛門は密かに再建案を持っていたが、忠増は真田六右衛門の再建案を基に時の老中柳沢吉里（吉保の子）より十万両を借り出して再建に取りかかった。

去程に加賀守忠増卿は十二月六日小田原へ御着き有りて御見分有りけるに、町郷中の手負い、死人夥しく、主なき死骸は悉く桶に入れ、車に乗せて谷津山に皆葬りける。此の時節、山号、寺号共に御意を以て元禄山慈眼寺と名のりて御建立ある。其の上大施餓鬼仰せ付けられける。ここに御家中の人々は、御城も大破なれば、此の上御所替えにてもあるべしと、私語一日片時も安き心はなかりける。然るに御列座の衆中も当惑して、只君の思召を待つより外は、他事なかりけるといえども、御家中の内にも大河内茂左衛門、我こそ軍法を以て、誰にもおとらざれば、再興せんと心中に工夫してぞいたりける。然るに大主忠増卿は御普請金壱万五千両御拝借遊ばされ、所々御巡見あるに、誠に大破の有様、目も当てられぬ事共故、中々一万両や弐万両の金子にては成就成り難し、君の御心にも叶い難くや思召されけん。御家中一統御目見仰せ付けられ、城楼破却の義に付、「中々我らが自力に叶い難し、汝らいかが思うや」との御意あって、其の席を御覧あるに「某、縄張り致し、普請奉行致すべし。」と申す者壱人もなく、歴々の士衆も冷や汗を流し、目と目を合わせ扣えたり。大河内茂左衛門も、我こそと思いけれども列座の内、発言なければ一言も吐難く其の時御用人真田六右衛門、去る月教学院本堂御普

慈眼寺（谷津）

請の節、御褒美為し延寿の御脇差代金三枚頂戴之仕り、先月五日入仏の有難く進み出て、思召叶い候わば、御城御用掛仰せ付けられたき段申し上げければ、其の席に於いて御城御普請総奉行御家老渡辺十郎左衛門、年寄役大久保右衛門兵衛、真田六右衛門、下司中根弥五右衛門、小笠原大左衛門、廣仲伊右衛門、小奉行大橋利十郎、いずれも器量抜群の者なりければ、誰あって一家中否というものなかりしかば、先絵図面を認め君へ差上る。

忠増卿是を御覧あるに三重の天守幷付櫓を構え、南を百間塀と号して、東に常盤木御門、九輪橋と名付けて刎ね橋を渡し、北に鉄門幷数十丈の乾堀、搦め手より打ち廻し幷兵糧蔵数戸、前塩蔵、裏御門幷御屋形、銅御門、千人溜、本櫓、二階櫓、中仕切り、馬出し御門、厩曲輪、鉄砲矢倉、南門、蓮池、密談嶋弁才天、それより八幡山、天神山外通り、三の丸御門、園切橋、何れも渡り櫓を構え、三の丸より地形十間にかき上げたり。誠に広々たる絵図面、大主是を御覧あって御心中に御悦びあって、随分出致すべしとの御上意を蒙りける。然るに二万両や三万両の金にては成就成り難く、同年十二月廿二日、君と共に参府して、御老中柳沢伊勢守（吉里）殿の留守居へ面談に及び、器量の六右衛門なれば淀屋常陸の方へ至り、十万両の大金を借り出し酒興の上、十万年に返納致す可き趣申し上げるとぞ、是らの斗らい柳沢伊勢守殿聞し召され御感喜ありしとぞ申しける。其の節、柳沢家の留守居淀屋の家の言う事なりととりなし、終に借用成就致しければ六右衛門は悦びいさんで、同廿八日小田原へ帰り、大工棟梁川辺音右衛門という者を呼びて様々に工夫致しける。

**再建の功により真田六右衛門らが出世するのを見て大河内茂左衛門は無念に思う**

爰に大河内茂左衛門は真田六右衛門、廣仲伊右衛門へ大禄を遣わされ、御前近く召されけるを残念に思い、殊に此度の御城普請兵学師に御談事之無事を心得難きと思いける折節、御頼みに依って、大目付役仰せ付けられける。此の時茂左衛門思いけるは、我ら元より客分にて士官の役はなさず、軍法を以て一家中に指南の道に遣い候儀と心得、門人執心の者幷組下を呼びて右の趣申し渡し立ち退く可とて腰兵糧の用意をなし静かに支度調えける。

## 旅のつれづれ俳句日記

剣持　芳枝

立冬も過ぎた長閑な日差しのある日、友人に誘われ秩父方面への史跡めぐりのバス旅行に出発した。渋滞もなく厚木道路より東松山インターへ、最初の見学地慈光寺に着いた。坂東三十三カ所霊場の九番札所で、珍しい大型青石塔婆を見ることが出来た。景色の素晴らしい所で日光連山、浅間山など間近かに見ることが出来た。昼食は長瀞ホテルでいただき、食後は荒川の流れによってつくられた渓谷で、奇岩怪石が見事な渓谷美を眺めていたら、河上から川下りの遊覧船が滑るように現れ、船のお客さんと私達とはお互いに手を振って、嬌声をあげて船を見送り最高に楽しい一瞬だった。緑の木々に囲まれたホテルをあとにバスに引返し、四万部寺や観音堂、大きな庫裡、山門、鐘楼などを見学しながら西武駅前ショッピングセンターに来た。そして秩父神社や屋台会館に行き今夜の宿秩父農園ホテルに着いた。

木道の入り日の近き白露かな
虫の音や灯りて宿の非常口

よく晴れた旅の朝、バイキングの朝食を美味しくいただき八時すぎバスは出発した。古くから関東の山岳信仰の霊場として知られる三峰山の三峰神社に着いた。山頂へはロープウェイも通い観光地としても有名なのだ。お社の素晴らしい彫刻に見入った。日本武尊の大きな銅像は風格があり立派だった。武家の信仰も篤く江戸時代には三峰講で栄えたそうだ。長いながい雁坂トンネルを抜けるとそこは山梨県、ここまで来ると甲斐の秘境とも言われる西沢渓谷は広葉樹の明るい渓谷沿いに遊歩道が整備され、豪快に流れる滝や奇岩を眺められ、紅葉の美しさも一入だった。昼食は恵林寺の境内でいただいた。玄関前に武田信玄の鋭い目が印象的な銅像がでんと構えていた。予定にはなかったが甘草屋敷にも寄った。庭に甘草やゲンノショウコなど薬草が栽培されていた。薬草の匂いが肌に滲みこんでくるような感じがした。

御坂トンネル、河口湖、東富士五湖道路から御殿場を経て夕暮れ近い小田原へ着いたのである。小春日和で天候に恵まれ、珍しい名所旧跡を見られて思い出深い旅であった。

小田原藩 兄弟 浅田 の敵討

# 『孝貞義鑑』散策（18）

鈴木　好（こう）

☆　帰路の歓待

水戸を出て二里、長岡宿にくると、問屋二人、組頭三人が百疋または二百疋ずつくれた。

二里五丁歩いて一行が昼食を取った小幡宿では村をあげて歓待してくれた。伊勢屋、菊屋、堺屋の主人は馳走を出した。庄屋、問屋二人、与頭二人が百疋ずつくれた。

堅倉を過ぎて三里ほどの竹原でも問屋がくれたが、金額の記載がない。

土浦から四里の牛久では、領主山口但馬守から奉札があり、問屋二人から百疋ずつもらった。

**誠道中花々敷　村々町々見物群集（くんじゅ）して市をなしけり**

であった。

こうして貰った餞別の総計は、江戸屋敷で貰った分も含めると白銀五十四枚で、これは金三十八両二分二朱、銀四匁五分に相当する。その他凡てで金九十二両二分、銀二匁三分あまりになったというから、一千万円に近い。兄弟の評判がいかに高かったかを実証している。なおこの額は、兄弟が仇討に出発するに際して貰った餞別に匹敵する。

目付の伊谷治部右衛門を長とした、差添（さしぞい）の徒、足軽その他下男たちが、小田原藩江戸上屋敷に帰着したのは十五日であった。その時の様子を、『万屋九兵衛の母』は次のように書いている。

五月十五日の夕方、江戸の上屋敷へ帰ってきたこの一行は、先頭が十手をもった足軽五人、次が羽織・野袴の浅田兄弟で、大小刀と衣服一式は江戸から持って行った藩主の下されたものである。次は黒羽織・野袴の棚橋と村田、足軽二人に護衛されて具足箱、つづいて馬乗の伊谷治部右衛門、あとは藤巻と山角と足軽たち、という列の組み方である。

江戸に着いて一休みする間もなく、上役への報告があり、様々な処理を終えて、兄弟はその夜はどこに宿泊したものであろう。

江戸の勤番侍は凡て、藩主の屋敷を取り囲む長屋に住む。これは家老も同じである。一戸建てに住むのは城主とその家族だけである。従って、江戸に着いた兄弟も、長屋の一室を与えられたものであろう。

江戸に到着した兄弟は、江戸の詰番家老近藤庄右衛門から通達を受ける。

「新知百石宛被下置」とあるがこれは五十石の誤り。『仇討実語』には次のようにある。

両人共侍に御取立　新地高五十石宛ヲ被下置　御広間席被仰付　代々御番帳内と相心得可申候

十八日、上屋敷で加賀守夫妻にお目見得し、「御懇之御意被成下置」、「彰道院様御筆之御教書被下置候」（『先祖書』）。

『仇討実語』には「忠孝之道弥可相励候」との直書まで貰った、とある。まさに最高の栄誉である。

『常陸の仇討』には、

惣御家中江　銘々身分相応之餞別致候様　被仰渡候由

とあり、忠真が如何に兄弟の行動を嘉賞していたかが察せられる。さらに「加賀守より支度金并鑓壱筋ツツ被下」とある。奥方（敬順院）も同席したのは、門次郎が若年であったから、母性愛が彼女の心をくすぐったのかも知れない。

大久保家の江戸上屋敷は、現在芝離宮庭園となっている芝浜手にあった。延宝六年（一六七八）忠朝が拝領し、元禄九年（一六九六）に上屋敷になった。

忠朝は、かなりに遊び心の豊かな大名であったらしい。貞享三年

前号までの章　（太字は今号掲載）

序章
第一章　時代背景
第二章　事件発生
第三章　敵討出発まで
第四章　諸国を巡る
第五章　江戸へ帰る
第六章　万助水戸へ
第七章　浅田兄弟水戸へ
第八章　本懐を遂げる
第九章　小田原へ帰る
一　江戸へ（途中まで）

今号

**第九章　小田原へ帰る**
**一　江戸へ**（途中から）

次号以降

第九章　小田原へ帰る
二　小田原にて
第十章　浅田家の系譜

に佐倉から小田原に復帰が許されると、小田原から石を運び込み、汐の満干を活かした汐入り庭園「楽寿園」を作った。ガラス障子のビードロ茶屋も有名で、綱吉も元禄七年と八年の二度、ここを訪れている。

文政元年、忠真は老中就任と共に上屋敷を江戸城**辰口南角**に移されたから、鉄蔵兄弟が忠真に謁見したのはこの辰口の上屋敷であった。上屋敷は忠真の老中解任後、芝金杉（増上寺海手）に移った。中屋敷は麻布に、下屋敷は巣鴨にあったが、老中になってから本所、木挽町などに移された。

**辰口南角**　ここに、時の老中や若年寄などの大名屋敷があった。評定所、伝奏屋敷も辰口に置かれた。千代田区丸の内一丁目三番の和田倉門近辺で、今はビル街になっている。

銀行倶楽部のあたりがこれに面した内濠から東に流れていた道三堀の入り口に当たり、この道三堀に濠の余り水を落とす石製の吐水口があったので、この辺一帯を俗に「龍（たつ）ノ口」と云ったという。

もと吹上にあった御三家を始めとする有力大名の屋敷は、明暦三年（一六五七）の振袖火事以後、防災のため市ヶ谷、赤坂、小石川へ移された。辰口、竹橋門、常磐橋門、雉子橋門外にあった諸大名屋敷は、上、中、下屋敷と分割され、上屋敷だけが元の場所に置かれた。しかし辰口、西丸下、外桜田辺にあった老中たちの屋敷は移動しなかった。

ところで、上、中、下とある大名屋敷は、弘文堂『江戸学事典』によると、明暦三年の大火で、豪華だった大名屋敷が焼失して後は、世間並みの作事となった。

上屋敷は登城や勤務に便利な地域にあり、藩主や家族の住む公邸で、面積は幕府の規定で決められていた。二万石以下なら二千五百坪、五～六万石で五千坪、十～十五万石で七千坪。但し水戸家と前田家は十万坪以上あった。

上屋敷には大藩で五～六千人、小藩で五～六百人が住んでいた。

中屋敷は外堀の内縁に沿った地域にあり、隠居した藩主や嗣子が居住した。火災などで上屋敷が被災したときの予備でもあった。

下屋敷は休息用の別邸で、築山や園池を設けた。今の新宿御苑十七万坪は、信州高遠藩内藤家の下屋敷跡であり、港区白金台の自然教育園六万坪は高松藩松平家の下屋敷あとであり、歌舞伎の「善悪両面児手柏」の中で、毒婦姐己のお百が、もとの主人徳兵衛をおびき出して殺した毛利家下屋敷跡は十万坪あった。文京区の六義園、後楽園、江東区の清澄庭園、港区の有栖川宮記念公園などいずれも大名の下屋敷の跡である。

**☆　江戸での餞別**

二十六日に江戸表を出立する前に、江戸屋敷で、伊谷治部右衛門の計らいで、餞別を貰った。和泉屋三郎兵衛が二百疋、御用部屋の御坊主一人が二百疋、奥右筆組頭二人が白銀三枚ずつ。同じく「白銀三枚　関十兵衛」とあるが、これは関小左衛門の父にでもあたる人か。もしそうだとすれば、この十兵衛が江戸屋敷で鉄蔵にじかに接して鉄蔵の人物を見込んで、息子小左衛門の嫁に鉄蔵の義妹、即ち浅田の末娘ハルを選んだとも思える。

なお、**御用部屋の御坊主**というのは『御届書写左之通』の末尾に、「右御届書并御取立之一冊　公儀御坊主星野久春より借受写置」とあるから、この星野久春かもしれない。

**御用部屋坊主**　江戸時代、剃髪者に三種類あり、寺の坊主、医師、そしてお城坊主である。吉原で一番もてたのはお城坊主だったから、寺の坊主はしばしばお城坊主になりすました。

お城坊主には奥坊主（小納戸坊主）と表坊主とあり、同朋頭の支配を受けていた。格は奥坊主の方が上である。奥坊主は将軍や諸大名にお茶を勧めて接待するのが仕事で、百人前後いた。表坊主は二百人前後で、大名、諸役人に給仕する。

坊主は仕事の内容によって、小道具役、用部屋、肝煎、時計役坊主などに分かれている。お数寄屋坊主は茶道の家筋の者がなり、城内の「お茶所」に詰めていて茶を出した。

殿中では如何なる大名、諸侯といえども家来を連れることは出来ないから、白湯一杯飲むにもお城坊主の世話にならなくてはならない。したがって坊主の機嫌をとっておかないと、どんな仕打ちを受けるか分からない。

お城坊主の中でも御用部屋坊主は、老中、若年寄の執務する御用部屋付だから、政務についての情報を手に入れられる立場にある。各藩の留守居役は坊主に憎まれないように腐心する。

坊主はその点をよく心得ていて、正月など、自分の受け持つ大

カット　内田美枝子

名を訪問してたっぷりご馳走を受け祝儀を貰うから、彼らの収入は莫大なものとなる。お城坊主を通した部屋にあるもので坊主に褒められたらやらないわけにはいかない。報酬が多いから奢侈に流れ、大方の御用部屋坊主は妾宅を持っていた。

『仇討細書』に書かれている万助人相書の末尾に「右　文政四年四月御坊主写取候事」とあるが、これも星野久春か。明和八年の『武鑑』に星野久務は芝麻布辺として表坊主に名を連ね、また『甲子夜話』にも登場している。星野求覚が慶応三年に御数寄屋坊主をしている。星野久春はこの系統であろう。

**御広間席**　御番帳入の侍の最下位に位置する職分で、寛文十年まであった「馬回役」が改称されたもの。馬回役は、百八人から百四十二人で編成された戦時の第一線部隊だが、戦時体制を必要としなくなった享保九年（一七二四）に「広間席」となった。

文政八年の『小田原藩順席帳』によると、「大年寄」を筆頭に三十ほどの職名があり、最後の「広間席」が「御番帳入」五百十九人の最後で、その下は「御番帳外」三百十九人となり、徒小頭から小役人まで百八十人、その下に「組抜」廿三人、その下に「組足軽」三百六十九人、その下に「中間」百五十六人がいる。

番帳入といってもピンからキリまである。ピンの大年寄は一人で千五百石、キリの広間には五石二人扶持が十人ほどいるが、この扶持は足軽並である。足軽は大体、切米五石二人扶持である。

鉄蔵と門次郎は足軽の五石二人扶持から「組抜」と「御番帳外」までの三、四百人を飛び越していきなり五十石の知行取になった。もっとも知行取といっても、実際は現米支給であったが、それにしても十倍のアップである。しかも一代限りの番帳入りではなくて永代である。子々孫々にいたるまでである。

足軽から「御番帳入」した者も何人か居る。しかし彼らは一代限りである。但し在職中に「広間席」の二つ上の「中之番」になれば以後永代となる。

川口漉（すき）右衛門の場合、千代村の百姓から足軽川口家に養子に入った。精励恪勤すること三十六年、その間に賞を受けること数知れず、遂に「御番帳入」を果たした。しかし石高は五石二人扶持から七石二人扶持止まりであった。嫡子も「広間席」であるところを見ると、「中之番」になったものか。これを見ても足軽から「御番帳入」することの難しさが窺われる。

順席表と石高はかならずしも併行しない。順席が四番目の番頭十一人の筆頭は千百石で、ドンジリは百二十石だし、寄合十八人には六百石から六十石までいる。広間にしても、百九十人のうち、二百五十石が一人、二百二十石が一人、五石二人扶持が十人いる。

してみると、順席はむしろ能力序列であって、無能な侍は石高は多くてもそれは世襲のもので、いわば窓際族あつかいされたのではなかろうか。

家老、年寄などは世襲ではなく番頭クラスから抜擢される。

順席には役高が決まっていて、もともと役高より家禄高が高いものはそのままで、禄高が低いものにはその差分の高、すなわち足高が在任中だけ支給される。足高の制度を定めたのは吉宗である。

**川口以外の御番帳入の例**

須藤新兵衛は精励格勤三十五年にして御番帳入。

清水湧右衛門の祖父は御番帳外で、養父は足軽であった。然し湧右衛門の実家が御番帳外だったので、湧右衛門の入婿によって清水家は御番帳外となり、十五年して御番帳入した。

関谷源右衛門の先代は広間席だったが、不束の儀があって番帳外となり、当代もそれを引き継いだが、二十三年後に広間席に戻った。

福住応右衛門家はもともと三石二人扶持であったが、曾祖父の時に七石三人扶持の御徒となり、後に番帳入したが、父の時に番帳外となり、さらに御徒に戻された。当代になって九石三人扶持で広間席に返り咲いた。

**拝領品**　拝領品を見ると、圧倒的に衣類が多い。そして、いずれも高級品物ばかりである。こういう拝領品は実用にはならない。家宝として、汚さず、傷つけず大切に仕舞って置かなくてはならない。もし紛失でもしたら切腹ものであったろう。名誉この上もない代わりに、迷惑この上もなく、まさにホワイト　エレファントであった。

拝領品は、麻の上下（かみしも＝裃）から細かい模様を散らした小紋入りの股引まである。小紋は現在では婦人の和服に使われているが、江戸時代には上下に多く使われた。

『先祖書』で鉄蔵は次のように申告している。

水戸宰相様　金千疋　岸嶋
太織袷壱川越平袴壱絹小紋
単羽織壱小半紙煙草手拭壱
筋被下置
岩船従願入寺　桟留茶立嶋

袷壱木綿万筋単物壱相絵（ママ）受納仕候

上下は武士の礼装で麻が正式。同じ染め色の肩衣と袴とを、紋服・小袖の上に着る。

役人たちは、普段は「継（つなぎ）上下」を着る。これは初め夏の略服だった。上は肩衣、下は半袴で、地質や色合いが違ったもの。小紋や縞類などある。

袷は表裏を合わせた裏地の付いた着物。近世には、陰暦四月一日から五月四日までと、九月一日から八日まで着る習慣であった。

単物は裏を付けない一重の和服で、絹帷子ともいう。初夏から初秋にかけて着る。五月五日の端午から、庶民は単物を、武家は帷子（かたびら）を着る。

帷子は帷とも書く。単物のこと。生絹や麻布で仕立ててある夏衣である。

平袴は半袴と同じで、小袴ともいう。長さは足のくるぶしまでで、裾に括緒（くくりお）がない。素襖、肩衣の下に着る。

青梅（おうめ）綿は青梅の特産で、三枚で本裁ちの着物一枚分となるように延ばした綿。

川越平は川越地方の特産の絹の袴地である。

葛布は「かっぷ」とも「くずぬの」ともいう。葛の繊維で織った布である。

**生　糸**　葛の繊維で葛布を作り、繭からとった生糸で絹糸を作る。蚕が二匹で共同して作った繭を玉繭という。玉繭からとられた節の多い太い糸を玉糸という。玉糸の下級品が熨斗糸。

岸縞は、縦糸に染色した生糸を、横糸に玉糸や熨斗糸などの練り糸を使って平織にしたもの。

玉糸は太糸ともいう。玉糸または熨斗糸を使って平織にした絹織物は太り、太織、太り絹で、伊勢崎太織、秩父太織、渋川太織などが有名である。

紬（つむぎ）は紬糸、すなわち綿または繭を糸繰り車にかけてその繊維を引き出して、撚りをかけて作った糸、または玉糸で織った平織の丈夫な絹織物で、着尺や裏地に使う。大島紬、結城紬などがよく知られている。

生糸には、硬蛋白質であるセリシンが含まれている。セリシンは、繭糸の芯の二本のフィブロン繊維の周囲を包んでいるが、これを熱湯処理して除くと柔らかくなり、特有の白い光沢と柔らかな手触りが出てくる。

このセリシンの表面が溶けると、固まっていた繭糸の端（緒糸・ちょし）が離れて湯の中に出たのをミゴ箒に引っかけて取り出し、繭糸を目的の太さになるように、いく筋かまとめて一口として繰り枠に巻き取ると、残ったセリシンの力で一口の糸同士が密着して一本の糸になる。この糸を灰汁で処理すると、セリシンが除かれ練絹が出来る。除去の程度で、半練り糸、本練り糸と分かれる。

絹糸を取るのには蚕を育てなければならない。それに比べれば、葛、麻、藤、楮、しなのきなど、山野に自生する植物の皮を剥いで処理して作る方が安上りである。麻のなかでも大麻は繊維が太くて固いので、大麻の着物は庶民向けで、苧麻（ちょま＝からむしのこと）のほうがしなやかなので上等であった。何れにせよ安上りではあるがゴワゴワして着心地が悪かったので、江戸時代になって木綿布が普及した。木綿だって綿花から着物にするまでには大変な手間が掛かったが、絹のほうがさらに手間が掛かった。（つづく）

**「小田原史談」原稿募集**

次号第二三七号（平成二十六年四月発行）の原稿を募集します。締切は二月二十日です。論考・紀行・証言等をお寄せ下さい。お待ちしております。お問い合わせは左記へ。

小田原市南町四・一・二四
電話　〇四六五・二三・八六三五
松島俊樹

## 追悼・市川清司さん

会長　平倉　正

市川清司さんが、さる十一月十日に急逝された。

生前、父君の市川一郎氏の後を継いで、小田原史談会の理事、会計監査として長い間史談会の発展のために尽くされるとともに、永くお住まいの曾我地区の歴史について、膨大な資料と知識を傾けて研究を続けられていた。

その研究の集大成の「蘇我・宗我そして曾我への一六〇〇年の覚書」（『小田原史談』第二二〇号～二二四号所載）は、亡き一郎氏との共同執筆の形で書かれており、ここにも氏の父君に対する敬慕と父君の研究を完成させたいという思いが溢れているといえる。

一千年余も昔から現代に至る曾我の歴史を網羅すべく試みられた研究で、特に苦心されたのが年表であった。西暦三百年代から二千年代までを横軸に、曾我に纏わる様々な事柄を縦軸に網羅すると云う壮大な試みである。その試みも、氏の急逝で未完に終わったことがご本人も残念であったと同時に、読者にとっても惜しまれることである。

どうか、安らなご冥福をお祈りするばかりである。

# みみづく園長一代記

千葉　恵美

## 傳肇寺

私の主人（亡夫）は千葉林定といって傳肇寺の住職をしていました。その先代住職を千葉満定といいます。

千葉満定の家は瀬戸内海の島、多分広島県大崎下島の大長（おおちょう）地区にあり、そこで大きな廻船問屋を営んでいました。景気がいいときは廓の大戸を閉めて貸し切ったといいます。

ところが店が潰れてしまい、満定は京都のお寺の小僧さんになって修行した後、芝の増上寺で執事長を務め、七つも八つも空き寺を兼務していたそうです。増上寺の塔頭のひとつ安養院の住職、千葉寛鳳に見込まれ後継者となりました。満定は浄土宗の法式をまとめ、特に声明（しょうみょう）を良く研究し、その実声が港区愛宕のＮＨＫ放送博物館に保存されているそうです。満定の著書に『浄土宗法要儀式大観』『浄土宗法式精要』があります。これらは現在使われている浄土宗の教科書の元となっています。

満定には男の子が三人いて長男が安養院を継ぎ、次男は貰ったお寺をすぐに売ってしまいました。末っ子の三男が千葉林定で、長男とは二十歳も離れており、林定が十四歳のとき満定は亡くなり、十九歳でここ（傳肇寺）を継いだのです。ここへ来たのはいいけれど戦争直後で食べられず、檀家も四十軒くらいしかなかったのです。ある檀家さんが林定を横浜市役所へ入れてくれたけれど、性に合わなくて半年くらいで辞めてしまったそうです。母（満定の妻）と二つ上の姉をここへ連れてきてジャガイモを植えて飢えをつないでいました。

後列右から２番目が千葉満定（義父）
前列右が北原白秋、左が菊子夫人

## みみづく開園

北原白秋がこの寺の茶室に住んでいて「子供の園（その）を作りたい」と言っていたことを覚えていた林定は、土間を改造して昔の寺子屋みたいに安い机を買って幼稚園をやろうとしました。その頃は花園幼稚園で二部授業をしていたほど子どもが多かったのです。どうせ作るなら近代的な幼稚園を作りたくて、貸し地を売ってもまだ足りないので、お金を借りて建物を建てました。当時の小田原市長さんが「白秋がいた場所だから保育園を建てたら」と勧めてくれたけれど、主人（林定）は「おれは幼稚園にする」と言って幼稚園を作りました。建築中に入園希望者が七十人も来て、翌年は二倍の百四十人になったそうです。

昭和二十八年（一九五三）の設立当初はお金がなくてオルガンも買えなかったけれど、色々な人に助けられたんですよ。水子の骨壺を持って歩いて困っている婦人がいてこのお寺で引き取ってあげたら、そのお礼にと毎年盆暮れに五千円寄進してくれたりね。教員が月三千円の時代ですよ。その婦人にお願いして電蓄を買ってもらったり、当時のＰＴＡの会長さんのご主人が、「娘がお世話になります」と一万円持ってきてくれたり、近代的な幼稚園として新聞にも取り上げてもらったりね。

## 旧姓は八百谷

私は中村原の出です。台山というところ。旧姓は八百谷（やおたに）です。父の実家は下原の廣済寺（こうさいじ）で、父は九人兄弟の三番目です。岩倉鉄道学校出て鉄道員で本庁に勤めていました。

廣済寺を継ぐべき一番上の兄は早稲田の一期生で新潟で教員をやっていました。私の父と母は廣済寺の留守を守っていましたが、長男がこちらに帰って来ることになったので父母は引っ越し先を探していたんです。

ちょうどその頃台山に住んでいた裕福な「御用商人」のおじいさんの御世話をしたことが縁で、おじいさんの跡取りになって御屋敷を引き継ぐことになりました。私は五人兄弟姉妹の末っ子で、昭和六年にそこで生まれ、すぐ上の姉とは八つも離れていました。

戦争中は線路伝いに小田原高女に歩いて通い、列車のデッキにぶら下がって通ったこともあります。防空頭巾と救命袋を背負って学校に行くんです。学校では楮（こうぞ）の皮むきです。先生が

今日ははんぺんのプレゼントがあると言ったり、月給もらったりね。木炭車にも乗り、空襲にも遭いました。カーチスやグラマンの機銃掃射で、大きな眼鏡をしたパイロットの顔も見えましたよ。

**お見合い第一幕**

ＰＴＡの役員会で「園長先生（林定）そろそろお嫁さんをね」となって、ある人が「一人いい人がいるけれど」と言ってね。それで私の母がこのお寺に下見に来たら、林定園長は「品のいい人が歩いている」と思ったそうです。

翌日、園長から急に、「お宅の恵美さんを見に行きたい」という電話が父のいる役場へ入りました。それからが大変。近所の人や檀家さんを呼び集めて、二時間で障子張り、畳は花ゴザを買って敷いたりね。まるで一夜城。

仲人さんは四十代の恰幅のいい方で園長は二十八歳でコンビの靴履いておしゃれしてました。その頃私は洋裁やっていて、ボレロ、えんじの洋服着てね。

私は「ハイ！」と出て行った。園長は恥ずかしくてはっきり私を見る事が出来なかったみたいです。私は目を大きくしてはっきり相手を見ましたよ。男前でした。

父は、「恵美、コンビの靴履いて、あれはたいへんだぞ、派手だから気をつけなきゃいかんぞ」「幼稚園には女の先生が一杯いるし」と気乗りしなかったようです。しかしその頃、信用金庫に勤めている人と縁談があって、母はサラリーマンにお嫁にやるよりもお寺の方がいいと思っていました。園長は私のことを「目はぱっちりしていたけど、お猿みたいだったよ」なんて話していたんだそうです。

**第二幕**

もう一回直ぐに会おうということになって、翌々日小田原駅で会いました。そうしたら三ヶ月の定期を買ってくれたんですよ。

それからは二日おきで、小田原駅で待ち合わせると、幼稚園の父兄に見られるからとパッと車を呼んでよく箱根へ行きました。帰りは洋服生地や靴やらいろいろ買ってくれて、必ずここ（幼稚園）に寄りました。母（義理）に、「今日はこんなの買ってもらいました」と言ったら、「良かったね、買ってもらって。きっとお前さんは気に入られたんだね」と。

**いつのまにか開園六十余年**

二十三歳でお嫁に来た時は幼稚園の保母の資格を持ってませんでした。

主人は「自分の奥さんを先生にしようとなんか思わない。資格なんていらない」と言ってましたが私はどうしても幼稚園に入って子供を教えたくてしょうがないわけ。「資格を取りたい」って言ったら「じゃあ行ってくれよ」と言ってくれてね。それで、資格を取るため鎌倉女子大の夜学に通い始め、子供が出来たりして中断することはあったけれど定時制の高校に通っている生徒に昼間はお手伝い頼んで何とか資格を取りました。それが済んだら今度は歌の教材「コンコーネ」を勉強して資格を取りました。本当に大変だったですねえ。だけど子供達の中に入ることが好きでしたからね。それからずーっと先生やっています。

開園は主人が二十七才の時、昭和二十八年（一九五三）で、主人が存命中の平成十五年（二〇〇三）に創立五十周年を迎えて中央公民館で記念行事を催しました。今年は開園六十一年になります。

主人が亡くなって私が園長になりました。

傳肇寺の現在の住職は、私の娘浅井皋月（あさいこうげつ）です。住職と一緒に寺に住む者を「寺庭（じてい）」といいます。お客様がみえたらお寺の広い庭のように接することが私のモットーよ。

**「ただのおばあちゃんだよ」**

今ですか。やはり園長やっています。園児の顔を見れば、今日は朝泣いてきたなとか、今日はお母さんに怒られてきたとか、すぐわかるんです。

朝、園児がバスを降りると、「おはよう」とタッチするの。私は必ずアクセサリーをつけてくるんです。すると子供たちが「きょうの園長先生のダイヤモンド、すてきだよ」とか言うんです。全部ダイヤモンドになっちゃうんですよ。「きょうのお洋服すてきだよ。にあうよ」と言ってくれてね。すごく可愛いの。

座っていると、小さい子が「園長先生いつ赤ちゃんが産まれるの」ってね。お腹大きいからね。「産まれたらかわいがってね」と返事するんです。すると、年長の子が「あんた、本当に園長先生、赤ちゃんが産まれると思ってるの。ただのおばあちゃんだよ」って教えるの。「そんなこというんじゃないの」「ごめんね」なんてね。そんなこと話して、可愛いです。楽しいですよ。

（平成二十四年十一月）

# 小田原の街角写真今昔　②

（岡部忠夫先生のアルバムより）

植田　士郎

前回は今昔が明確にわかる写真を代表的に掲載させていただきましたが、今回は岡部先生が小田原の街ごとに纏められたアルバムの中から風祭、板橋地区の懐かしい写真を中心に紹介したいと思います。

特に板橋地区は小田原市の中でも神社仏閣が多い街で先生も山門等多くの写真を残しています。

最初の写真は有名な板橋地蔵尊の例大祭の賑わいです。

地蔵尊の参道　道の両側に多くの縁日が出ています。
屋外パチンコも　（1967年1月）

右の写真は風祭の萬松院の四十七年前の写真です。屋根は本堂、庫裡共に萱葺きで現在（左の写真）は庫裡のみ萱葺きです。

萬松院遠景(2014年1月)

萬松院遠景(1967年3月)

さて、板橋地区には明治から昭和にかけて多くの政財界人の別荘が建てられました。中でも山縣有朋公の古稀庵(七十歳に建てた)と、夫人の居宅であった暁亭の庭園は見事であったそうです。

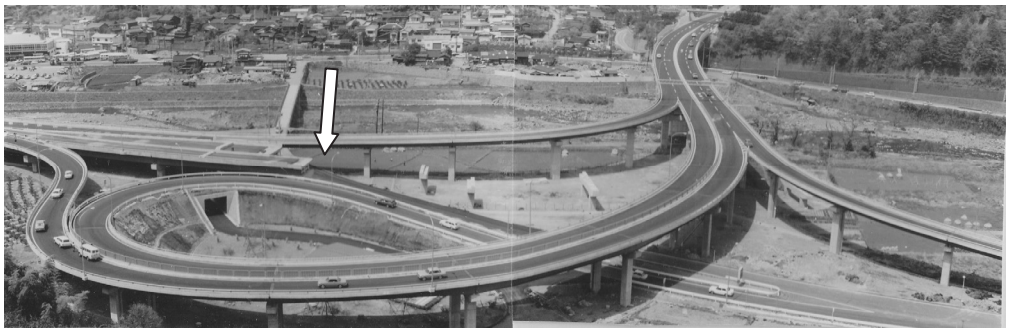
当時の古稀庵（1967年4月）

山縣公直筆の額（1967年4月）

先生はこの年の春は主に板橋地区を重点に散策されたようです。

五月にはターンパイクの途中から一部開通になった小田原―厚木道路のインターチェンジを俯瞰撮影しておられます。

次回は南町界隈をご紹介します。



早川のインターチェンジ（1967年5月）
矢印の部分は当時工事中（2年後に西湘バイパスと連結）

**小田原史談会　史跡めぐり**

## 早春の房総へ行きませんか

年間計画では松代方面（長野県）でしたが時期的に心配との声がありましたので変更しました。
ふるってご参加下さい

**日　時：　平成26年3月18日（火）**

**集　合：　小田原駅西口　　午前7時50分　　8時出発　小雨決行**

**帰　着：　午後7時頃（予定）**

**コース：　加曽利貝塚**（国史跡）**と同博物館**（千葉市）　日本最大規模の貝塚

**旧安西家住宅**（木更津市）　代々組頭をつとめた家

**木更津市郷土博物館金の鈴**　木更津市の歴史を展示

**證城寺**（木更津市）　狸ばやしのお寺

**会　費：6500円　（当日、現金で集金いたします。）**

**受　付：平成26年2月18日（火）午後1時～19日（水）午後8時まで**

**電話　0465-22-1076**　(史談会受付窓口　内田)で受け付けます。

## 佐奈田与一余話

### その①　我が家に伝わる「さなだのよいち」様

私の家は埼玉県日高市にあります。先祖代々、大晦日の晩、お膳にご飯と汁を載せ、そのお膳を捧げて家の敷地をでて五十メートルほど先の辻まで行き、そこにお膳を置き、「さなだのよいち」様に一年の感謝を述べ食べてもらい、そのご飯と汁を家族全員で少しずつ食べるという行事があります。

屋号は海なし県の埼玉県でありながら「沖」といいます。また、屋敷地内には、通常の社の他、「金山様」の社もあります。さらに敷地内からは鎌倉時代の「宋銭」も見つかっています。近所でもとても古い家といわれていますが、いつの頃からこの地にいるのか定かでありません。

先年亡くなった父が、たまたま旅行で小田原の方に出かけたとき、バスガイドの「さなだのよいち」（佐奈田與一の説明だったようです）の言葉を聞き、少し興奮気味に家に戻ってきました。その後調べてみたところ、佐奈田霊社のことを知りました。私の家では、「さなだ」を勝手に真田と勘違いしていましたが、氏と名の間に「の」が入っていることを考えれば、鎌倉時代の「佐奈田與一」のことだと考えた方がいいのかなと思っています。先祖のことが少しでも知りたくて投稿しました。

私の家には、大晦日の「さなだのよいち」様の行事の他、正月にお雑煮を作らず、里芋の芋汁（味噌味です、醤油を使わないところから、関東に醤油が入ってくる以前の習わしかと思います）を食べる慣習があります。お餅を入れたりもしません。また、大晦日の晩に、ピンポン球大のご飯玉を十二個作り（十二ヶ月を意味します）、仏様にお供えもします。十三個作る年もあります。太陰暦のころの十三ヶ月あった名残だと思います。こんなことを行っている地域やお家があればそれも知りたいと思っています。

（埼玉　関　孝夫氏）

小田原史談会ホームページ「佐奈田霊社シリーズ」を見られた関様より大変興味深いお話を投稿していただきました。深く感謝します。

### その②　佐奈田飴本舗創始者　剣持真作さん献納の碑（佐奈田霊社御神木の根元）

（小田原史談二三五号参照）

大正七年正月吉祥日
治承四年　八月
義忠公戰死の時
臣　家安其遺骸を
埋めて傍らに植うる
所と傳ふ
小田原町
佐奈田飴本舗　劔持真作

御神木

**新会員紹介**

栢沼　正直　住所・小田原市浜町

**会員の方へお願い　―新規会員募集―**

小田原史談会では常時新規会員を募集しております。郷土の歴史に興味をお持ちの方に是非会員になっていただくよう、お誘い下さい。申し込みは史談会役員または左記へ連絡願います。会費は年額三千円です。

小田原市堀之内三一一-五
電話　〇四六五-三七-七一八八
植田士郎

# 謹賀新年

会員の皆様　本年もよろしくお願い申し上げます

平成二十六年　元旦

会長　平倉　正

## 特別賛助会員

紳士服の アメリカヤ
税理士法人 報徳会計
伊勢治書店
かまぼこ
(株) オクツ 薬局
小田原ガス
小田原報徳自動車
かまぼこ 籠清
㈱カネボウ化粧品小田原工場
かみやま小児科クリニック
興電社
創業四百年有余 料理茶屋 小伊勢屋
㈲ 小松石材店
COMTEC コムテック株式会社
さがみ信用金庫

手打そうどん 小田原城趾前 田毎
のれんと味 多々良
そばそ 二宮
茶半家具株式会社
ちんぎょう本店
割烹料理 うなぎ 鳥かつ楼
和菓子 菜の花
杉崎茂法律事務所
平井書店
㈲ 古屋花店
株式会社 報徳
建築金物 家庭金物 (株) 星崎仲吉商店
本多時計店
学生専科 マルク
曽我の梅干 塩辛・かまぼこ 美の政
㈱ アルファ

小田原史談（年四回発行）
創刊 昭和三十六年一月
会創立 昭和三十年七月

禁無断転載

年会費 普通会員三千円
振替 〇〇二二〇―三二六四三三六
小田原史談会

小田原史談会ホームページ　URL　http://odawara-shidan.hustle.ne.jp/　小田原史談会　検索

## 落穂集

蒲鉾の看板がない小田原は考えられません。その代表的な店「籠清」の石黒さんに蒲鉾の歴史を聞きに行きました。話は川崎長太郎・尊徳・徳富蘇峰・三浦しおん等々の話にまで広がり大変楽しいインタビューとなりました。◆北條氏滅亡後、氏直の「娘」を連れて江戸に逃れた小栗吉右衛門を先祖とする漬物商「小田原屋」を求めて石井さんは東京を歩き、多くの書物を調べ小栗家に迫りました。楽しい挿絵も大いに楽しめます。◆辻村甚八郎は最乗寺をめぐる関本村と飯沢村との争いを仲介し、小田原藩窮乏を救いました。これを称え道了尊廿六丁目にある立派な杉を「辻村夫婦杉」と名付けよう、と内田さんは提案されています。私もこの提案に相応しい立派な杉を見て来ました。◆今号より旧橘地区の会員に郷土史を書いていただきます。最初は梅田さんの「中村湖」生成と消滅の歴史です。中村一族が隆盛であったころ「中村湖」が存在していたことになります。歴史は面白い・・・。◆鳥居さんの「大秘録」で元禄大地震の生々しい状況・エピソードが語られます。この地震についてこれだけ詳細に書かれたものは他にないと思います。◆水戸を出立した浅田兄弟は足軽の身分から二階級特進して御番帳入り、しかも永代、破格の出世を遂げます。得意満面の二人の顔が浮かびます。◆みみづく幼稚園長、千葉さんがご自身及びお嫁入りした傳肇寺について楽しい語らいをしていただきました。これからも「小田原史談」をご愛読ください。